

川柳塔

昭和五十二年十一月二十五日印刷
昭和五十二年十二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷 六〇七号



日川協加盟

No. 607

52年度二賞候補作品

十二月号

「旅人」以後の

麻生路郎作品 (43)

三十九年八月号

不朽洞句帖

オリンピックで 下痢気味のジャパン
千裂れ千裂れの思想というものを
見送る

彼の死は枯死には少し早かった
肉休から離れる寸前の彼が
遺した言葉

母の路線で

女検事の慟哭

霹靂火の僕に

雨がやみそうだ

本社七月句会 黒

大物の急死は黒のままだった

南海電鉄川柳会

白バイへ雨は斜線の如くふり

傍
島
静
馬

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶ た ま ん や き ぎょうざ
豚饅・焼餃子
しゅうまい ちやあしゅうまん
焼売・叉焼饅

大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

支店・出張店

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
近鉄百貨店 (アベノ店・上本町店・奈良店)

長 生 き

錦繡のとばり裏磐梯は晴れ衣裳

妖精の素顔秋の彩と燃え

理論整然笑顔がとぎれがち
倒産したK社長夫人へ

ほんものの夫婦になって歳が暮れ

歳の暮れ二人三脚すばらしい

こちらはボンヤリして居ても、おてんと様は正確なもの。今日机に向
っているのは12月号の原稿である。12月といえば、なんと言っても黄昏
である。黄昏のわびしさは老齢になる程きびしいもの。折も折とて、脳
外科医である三男のすすめ、頭脳の断層写真撮った。自分の脳味噌
を輪切りにした写真を見たことのある方は、恐らく余り多くは居られぬ
と思うが、コンピューター断層撮影と呼ばれる機械である。最近医学医
術や医療機械の進歩発達は恐ろしい。出来上がった写真を見て三男の説
明するところによると、脳組織全体の萎縮は仕方がない。時々もの忘れ
のひどい位は当然だろう。今に恍惚状態が待っているかも知れぬが、そ
こ迄にはまだまだ可なりの年月を要すると思うと言う。やれやれ子ども
達にかじられた脛の細そさを感じる前に削られてゆく脳組織に気付かね
ばならぬとは、この上の長生きは、一寸考えものかな。阿々。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 十 二 月 号

偶感

橘高薫風



座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

子に背中洗われ分る親の幸

辻圭水

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

長生き

中島生々庵 (1)

偶感

橘高薫風 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(十七)

中島生々庵選 (4)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (28)

題詠がいか雑詠がいか

東野大八 (21)

秀句鑑賞

(同人吟)

河村日満 (26)

愛染帖

高杉鬼遊 (27)

古川柳現代解釈法

橘高薫風選 (44)

52年度二賞候補作品

香川酔々 (48)

(36)

川柳の選をするというのはむずかしいものだ。結果が十人十色であることが、無能の選者にも決定的な劣等感を与えずに選者の地位を保たせている一因になっている。名選者の選には風格がある。雑詠にしても題詠にしても、内容やリズムの上で、新古・剛柔・緩急を自在に、まるで歌仙を読み進める趣さえ感じさせられ、まことに「作品は作者と選者の共作」なる実感を得る。だから、選の披露に先立って、統一選でございませう、順不同であるなどの発言を私は好まない。時間の許す限りは句の配列一つにも選を盛り上げる効果を出すべく、選者は努力しなければならぬ。

百姓も左官も担わなくなりぬ 好啓
田中好啓さんが、この句を平安川柳社二十周年記念大会の応募作品の一つに示されたのを見たとき、実にうまい句だと感じた。百姓と左官の取合せが良い。左官が他のどんな職業よりもこの句に適っている。それに「担わなくなりぬ」の措辞が何としても良い味なのである。肩と腰を酷使した労働から離れつつある現代社会の風潮に対する批判も立派に出来ている。そう思った。だが、大会では、平安川柳社若手六名

路郎選・古川柳の味	八木摩太郎	(23)
一分間の柳論	阿萬萬	(49)
思いつくままに	大路西幸	(50)
私の提案	西田柳宏子	(47)
編集室訪問	植村客遊子	(47)
バンコクで拾う	黒川紫香	(35)
雅号ぶっちゃけばなし	藤田頂留子	(55)
初歩教室	本田恵二朗	(54)
大萬川柳「気まま」	川村好郎選	(56)
柳界展望		(58)
本社十一月句会	(庸佑・整理)	(62)
各地柳壇(佳句地10選)	奥谷弘朗選	(63)
「七面鳥」	不二田一三夫選	(52)
一路集「ゆず湯」	村上旭童選	(52)
「社会鍋」	小谷仙山選	(53)
編集後記	(三夫・葉子)	(69)



の選者は誰一人入選にしていなかった。細かい理由は色々考えられるが、世代の違いからくる断絶が主因であろう。選句での包容力というものを思わされた。

今年の路郎賞は森井菁居さんが獲得された。彼がこれからの作家であることを何よりも路郎賞のために喜びたい。一方、谷垣史好、高杉鬼遊、香川酔々、大路美幸といった作家たちの作品が、六名の選んだ路郎賞候補作のそれぞれの十句の中に選ばれていないのはどうしたことであろうか。(史好さんの句が水客選に一句抜けていただけ)中央や地方の川柳大会で常に気を吐いている川柳塔同人の中堅作家たち故に合点のいかぬものを感じる。私を含めた選者と、ここにも一種の相容れぬ垣があるのではなからうか。菊沢小松園さんが前月号で「この際思われることは、近來まだ川柳人というにはまだまだそこまでも到らない川柳の門口を蹴て素通りしような二年や三年の柳歴の人が何を感じたのか堂々と句集と名付けて得体の知れない代物を公表されることだ」。云々と、それが正気の沙汰ではない、精神鑑定ものではないかとまで批判されていることにも大きな齟齬を感じる。私は、句集「はたち」が出たりすると、大きな感激を覚えるのである。

それは作品だけの問題ではない。人生の諸事に関しても、誰もが自分自身、中庸を得ていると確信しているところに、多くの喜劇が起るのではないだろうか。



中島生々庵選

竹原市 森井 菁居

受賞の日酔い痴れてよし妻よ酌け

思いきり背伸びをしたら秋に触れ

鈴虫よ思いきり鳴け冬がくる

菊日和ざくろの欠伸見てしまふ

そつがない男に欠けた人間味

仮面はずして湯あがり猫になる

青森市 工藤 甲吉

ひょっとこで居れば世の中苦にならず

秋風や先亡諸霊回向文

山頭火のように氷雨の中を行く

銭金の話ばかりを耳は忌み

十二月チャイムが鳴れば集金屋

神戸市 小浜 牧人

古井戸に滾々と湧く父祖の恩

誕生日うしろばかりを振返える

夕闇が海にひろがりゆく 孤独

自惚れて自ら掘った穴へ陥ち

秋の砂丘は索漠として雨が降る

松原市 谷垣 史好

ブティックの扉開けると深い秋

登校の子らは元氣な脛を出し

軽薄なお世辞とり出す冷蔵庫

コスモスの主義主張なき乱れよう

妻や子がなくても祈ることがあり

八尾市 香川 酔々

自己主張五分進んだ時計持ち

玉碎の文字鉛筆で書いてある

神の存在朝日を受ける殉教像

紙漉きの家系の枷は逃げられぬ

風が吹く枯野の僧の道連れに

倉敷市 水粉 千翁

貧しさを越えた笑顔は母のもの
うなだれて純真無垢の嘘でよし
騒がれる頃は裏口閉めてあり
いさぎよく護る私をじっと見る

遠磨忌に寄す（十月五日）

七転び八起き一直線の道

八尾市 高杉鬼遊

雑木林のそこから風のあたたかし

善人が沈んで浮くのはメタンガス

傾いた他人の舟を見ていたり

おでんふつふつ外は木枯し

来年の暦に小さい陽が昇る

和歌山市 野村太茂津

大らかに見せて乙女心に疎い父

嫁がせる父の妬心に似た誤解

嫁ぐ娘へ人間臭い駄々をこね

妻の胸開く思いで娘に甘え

昂ぶってみせて所詮は父の位置

堺市 高橋千万子

無い振りも有る振りもして日日のどか

熟柿いま生をはなれて落ちた音

その中に自分が居ない日の誤算

手をかけぬ菊も負けじと花をつけ

堪えて来た美德を娘に笑われる

京都市 松川杜的

みちのくの旅に

トンネル、トンネル海を見ているひまもなく

ずー弁の船頭でよし最上川（最上川下り二句）

花笠音頭フィナーレとなる川下り（肘折温泉）

お女中のぐち聞かされて旅の宿

駅長が会釈してくれた山の駅

富田林市 和田維久子

長門の旅二句

巖洞門奇岩を晴れた声くぐる

秋芳洞太古のロマンの中にいる

桐一葉落した風を見とどける

貝の性はかない意地の殻を閉じ

夢のある姿は明るい影おとす

宝塚市 傍島静馬

サラ金がやたら目につく年の暮

絶対安静阿呆になれということか

亡夫のぶんも生きて欲しいと頼られる

待ちわびる返事が来ないひとりごと

気がついたときはわりない仲だった

高槻市 若柳潮花

すべり台仲間はずれた子に夕陽

張り替えた三昧持って出る秋の会

グミの実をゆすって秋の雨が降る

駅長と呼ばれ小さな駅に立ち

杖つけば子供も道をよけてくれ

尼崎市 黒川紫香

落ちつかぬ膝へ小猫が眠りに来
テレビ見ても小言云い止まず
辻折れる姿誰かに似る寒さ
往きも雨帰りも雨の旅終る
板歩道ぬれて春待つ水芭蕉

松江市 小林孤呂二

矢絰のお酌でやはり城下町
敗北と知るお酒は熱すぎる
受太刀のままで今年も終りけり
美味しさを取り合う卓にある和み
山並へ砦の哀史も聞かされる

新宮市 大矢十郎

逆境に芽生えた愛が美しい
どたん場で頼るお方が貝になる
毒舌の凶星へしばし言葉なし
クーラーの悪寒は借りた頭金
肩書きをせいっぱいの名刺だな

竹原市 小島蘭幸

おじさんのちゃらんぼらんにある魅力
個性それぞれチームワークの中にある
家計簿にやすらぎがある詩もある
夫婦の対話ですき焼き鍋煮える
和服の妻を見送り少し淋しくなる

大阪市 金井文秋

お見合のここらで妥協しようかな
本当に好きなら演技など要らぬ
住宅ローン生命保険かけさされ
情熱を真赤に染めて散るもみじ
引き継ぎへ意志も伝えている未練

大阪市 河野君子

秋ざくら痛みをわかち合っている
嬉しくてグラスに虹を遊ばせる
息子からいたわり貰う哀しみや
女性の敵を女と思いたくはなし
私が走れば風は方向音痴になる

今治市 月原宵明

銀行に首押えられ泳がされ
横面をはられ六法繰りはじめ
くさめして秋の深さの中に座し
それとなくお洒落ジーパン隙がなし
みの虫のいつ寝袋へ入ったやら

大阪市 那須鎮彦

神様におととい来いとヘルメット
眉太い鬼にベレーがよく似合う
野良犬に鎖の重さわかるまい
権利証のこんな重さで家が持て
美男美女ばかりと思う赤トンボ

岡山県 嘉数千代香

恵まれたくらしの愚痴を聞いてあげ

札束の匂いへ草木までなびく
勝算があるから弱音吐いている
コンバイン秋の詩情を消していく
もう年はとるなと風車が廻る

鳥取市 佐々木 静 泉

ごり押しが老坂ころげるはめとなり
娘がひとりまたひとり欠け妻という
露きらりきらりと太陽へ子守歌
水を得たように妻内職をはじめだし
娘に逢いにいくしあわせも俺のもの

米子市 林 瑞 枝

恋あきらめさせカタログめく写真
体質も似て膏藥も同じ個所
休日の朝寝プランをあきらめる
想い出に生き淋しくない仏間
体力の格差カバーの策を練り

倉敷市 小 幡 里 風

一人旅ひとりで決めたい事がある
ただ一歩おくて歩く主義にする
真実を知りたい大きな嘘をつく
酒の事故見舞に結局酒をさげ
ごめんネとそんな仕草に救われる

東大阪市 竹 中 肖 二

またたいて旅情ぬくめる港の灯
雲少し流れて明月らしくなる

一軒がポツンと建った分譲地
外濠に白鳥浮かぶ城下町
意地はもうないお迎えを待つばかり

大田市 藤 田 軒太楼

座の乱れ万才三唱の頃と知る
定見のないのが派手にする拍手
恩着せに來たなと判かる言いがかり
耳寄りな話を妻は追い返し
誘われて引立役とわかる連れ

大阪市 本 多 柳 志

ゆずられた優先座席にある自啮
金のこと配慮に入れて口を出し
流線型に立ってラッシュに耐えている
バス初発今日のピエロの幕が開き
貧乏神だけは居据る神無月

岡山市 時 末 一 灯

一軒だけの日の丸無風になってくる
明日があるから落目へさようなら
靴下を裏返し今日へ目を瞑り
休日を三文判の顔で寝る
秋色よ とても悲しい金魚の死

愛媛県 渡 辺 暁 童

萩のみじめは 雨の散り際
八百長ほどこに うっちゃりが冴え
三者三振 野球拳なみ

ふつふつと湧く 古稀の闕魂
信士信女が 身分相応

和歌山市

内 芝 としよ

地の温み信じて木の葉も地に還る
悔抱いて戻る過疎地は天高く
覚悟して貸した金にもある未練
天っ辺で熟柿は落ち時考える
少年の大志天まで秋日和

下関市

国 弘 半休門

人質の機長あなたは強かった
母子家庭健児はそぼそピアノ弾く
社会党ゆでた玉子で解け合えず
信号待ち兎と亀の歩をせばめ
浮き草のようで安定所の人溜り

倉敷市

田 垣 方 大

気苦労があっても寡婦の美しき
路地裏はがなりあっててあたたかし
苦勞した人は苦勞を口にせず
十二月社長も腕を試めされる
ふりむけばマラソンしてたような過去

大阪市

中 川 滋 雀

一筆を添えた名刺へすがりつき
柏手の冴えぬ祈りに小さく居る
人の世の果かなさ通夜に酔いつぶれ
くつ下の厚さに秋が忍びより

本願に遠く聞法の座のしびれ

東大阪市

落 合 思 月

横のものたてにするのに妻ともめ
倅せな日曜大工で今日も暮れ
尻尾ふるくせが抜けない平社員
筋書の通りに進んで物足らず
微笑めば妻も可愛い顔に見え

竹原市

山 内 静 水

頼りない返事に機先制しられ
嘘をつく真顔うす気味悪うなり
やすらげき妻の寝顔の丸い鼻
奥さんの声確かなり喪の電話
灯をはじく鯛本懐をとげし如

和歌山市

小 川 佐知子

世の不幸一人背おった気になる日
捨てられぬ虚栄に打算ある絆
飲む程に嘘かるく出る面白さ
生きている証し涙をふいて起つ
ためらいを断ちきる発車ベルが鳴る

竹原市

鈴 木 かつ子

絵のように暮れゆく山を畦に立ち
モナリザの微笑そっくり子の寝顔
うしろから見れば仲の良い夫婦
風だけがしる鍵っ子のひとり言

疊がえしてお目出度い日をかぞえ

岸和田市

高橋操子

(8月20日入院・9月30日退院)

なんぶん
何分のいのちへ有りがとう救急車

さまよえるいのちを戻す孫の声

ホットした笑顔院長さまと知る

病む室へ孫や娘の夜具巾を取り

退院のお別れなぜ泣けてくる

泉大津市

村上春巳

稼げども大樹の肥になる生活

親馬鹿の馬鹿になる日の包紙

だんじりへ親子の絆綱を牽く

まっすぐに歩けばひとに突きあたり

角切った鹿の鬨志の衰えず

岡山県

出原敬一

恵まれた余生午後から耳掃除

俳画展名句にからむ豆の蔓

きつい嫁にも仕えたわが家の漬物石

めぐる季の風に鐘の音のびちちみ

年ごとに菊を咲かせて妻老いる

今治市

越智一水

名月へ不況わすれて酔いつぶれ

歎異抄母手ばなさず旅に持ち

人間の子ではないのかハイジャック

あめつちの中で人間おろかなり

父の服着ていてかがし父に似る

島根県

堀江正朗

一才の孫の動きと比べられ

ゆっくりゆっくり食べていて舌を噛み

その中に妻も混って孫自慢

お茶注いで孫の写真も仲間入り

抱き上げてじいちゃんらしく写りたし

松江市

柳楽鶴丸

フアッションの歴史にモンペもありました

死の瞬間本当の男になる日です

出て頂戴菊人形の黄門さん

ミクロンの違いで受注取り消され

凡人の中の凡人になりたいナ

八尾市

高橋夕花

風の日には風に従い座を守る

子の留守は夫婦しずかに灯をともし

すこし豊かに女は秋の実を食べる

栄光の友より貰うぬくい鞭

幾山河妻の鈴にも飢えがある

八尾市

宮西弥生

女ひとり目覚める朝はブルーです

秋空へ無にかえる日の絵筆

花括けて女は忘れた事にする

ゆずられた善意の席で老い眠る

女友達打てばびきすぎてもめ

富田林市 板尾岳人

山の向こうの山はやさしいかな

雪便り金剛山に雪がない

北国の山の自惚れ雪地獄

山で死ぬこともあるかと酒を酌ぎ

山一つ下さいわたしは山男

大阪市 大坂形水

合鍵はあるが一応ノックする

勝ちながら亀の人氣は今ひとつ

やるだけのことやり今は寝たいだけ

糸へんの王様食べもの屋を始め

また頭もたげる問屋不用論

大阪市 不二田 一三夫

秋田實先生・大綱しゅようで急逝(52・10・27)

―可哀そうなお父ちゃん―電話も泣いてくれ

雑誌「漫才」廃刊(一勾)

血を分けた雑誌に恩師のお供させ

弾丸を詰め込むように食う若さ

主治医のほうが先きに亡くなられ

飲めない組があと片づけに回される

富田林市 岩田美代

灯を消せば一言多く耳が鳴る

言葉尖って受話器の重さ

心読まれそうで秋の灯を消す

五割引き女同士の話なり

大阪市 西出一栄

萩の庭名残り惜し気に蟬一つ

お月さんうちの団子もおいしおす

天高く女は鏡を磨くなり

七十五回目病院で祝う誕生日

伊丹市 樫谷漫柳

新聞の記事の通りに欺される

魚の目を育てる男靴を履く

奥歯のつぶれたのは男のシャリコーベ

貞淑が裁縫箱で疲れてる

出雲市 原独仙

あの時も秋雨わびしい想い出よ

拭きながら鏡お前も老化した

新聞の記事わがものとして自慢

それから真顔になって声落す

東京都 山根白星

場所柄を弁まえている子の正座

建前と本音で違う皮膚の色

これが別れの潮騒をきくふたり

風評を全く無視とまでゆかず

東大阪市 市場没食子

二度目の定退(2勾)

定退も二度目を迎え喜寿となり

仕事とも別れ墓場へまた一步

郵貯まで目減りどころか利子を下げ

無茶まかり通る末世かハイジャック

鳥根県

小 砂 白 汀

曲線を汽車直線で走り抜け

屋根瓦一枚割っても雨が漏り

横向いた文字本音ともとれる

一本になつては燃えさし消えるのみ

松江市

中 川 晃 男

城下町観光に売る化粧する

国宝のお城を照らす秋の月

灯がはいり堀に戻った城下町

観光バス去り堀端に虫が鳴き

鳥取市

小 林 由多香

流行はどうあろうと明るい柄を着る

台風の進路はずれた釘を抜く

手のひらへ転がせて見る米のでき

骨にまでしみた意見に大志抱く

八尾市

大 路 美 幸

創造の姿のままで山椒魚

頼むには言葉が少し多過ぎる

一身上の都合と書いた負けいくさ

まだ続く坂を見上げる咽喉仏

大阪市

津 守 柳 信

消燈を待っていました虫の声

習慣に振り廻されて大世帯

我を捨てて自分の彩を選び続け

夜長とは思えぬ朝の起きづらさ

藤井寺市

西

いわを

飄々としたカマキリを見飽かない

生物の営みを知る餌を漁る

人工を加えたと見る菊花展

熔接をしてこれからという寿命

大阪市

川 口 弘 生

両の掌を合せば嘘が逃げて行く

群に居て運のよい雑魚として生きる

お風呂場で会えば凡人の顔である

小さな旅 私の見付けた仏さま

生駒市

草 深 醉 升

あの頃の話しに余生花が咲き

めずらしく傘が荷物の雨男

ありし日の歎記を老の部屋に懸け

天平の柱見上げて撫でさすり

鳥根県

梅

みどり

日だまりのコスモス咲いて秋おしむ

一周忌風音さびし経の声

悲しみの心の糸にふれる愛

虫の音にふと亡夫偲ぶ月の影

寝屋川市

宮 尾

あいき

三朝旅日記

来てみれば憧れの砂丘雨に泣く

旅人の憂さを流してみささ川

陽が昇るみささの山はまだねむい
コンピューターに見抜かれまして浪費ぐせ

大阪市 山川阿茶

都心にも鳴く虫あって救われる
新聞は読まずラジオで用を達し
お月さん一人占めして山の小屋
現金な人の心は二で割れる

島根県 堀江芳子

秋更けて風の呼吸に鳴る落ち葉
出雲弁のぬくみが出ないテレビドラマ
まるくすむ夫は童話の主人公
ままごとのように夫妻でかばい合う

滋賀県 溝口はやを

秋風がからから通る胸の中
雌しべ一つ雄しべの何と多い花
孫のある年でもゆらぐ芯をもち
蟻地獄時にはそんな底で生き

大阪市 本庄金三

あの時の女子挺身隊が五十一
欠席の人は写真を送って来
膳の数未定のままで席をとり
平和なり巨城の跡に秋の風

大阪市 黒田真砂

手さぐりの上り下りは人生か
幸せに背を向け女の城閉ざす

派手に着て心貧しき秋の道
寝ころんで幼児も抵抗する構え

大阪市 江城修史

過去語る悲しきまでの子の記憶
限界があつて冷たい世間です
世話好きの顔を暮しを変えてゆく
名門の誇りは過去の隅に置く

大阪市 小出智子

人なつっこい犬と出逢うも秋の旅
子煩悩な男の微笑には負ける
灰皿に夫の癖が捨ててある
倅せな秋で襖を張替える

京都市 都倉求芽

糖尿病人入院

入院の用意へ秋空の青いこと
屋上でせめて秋空捉まえる
お見舞の花が病人らしくする
肥えた人がやたら目につくテレビジョン

岸和田市 福浦勝晴

シリーズは夫唱婦随と参りかね
だんじりの歴史に顔を出す喧嘩
負け犬に味方が欲しい凍てた夜
主客転倒すお喋りする見舞客

カセットの宣伝カーで飽きられる
松江市 恒松町紅

性格が子なき夫婦にしてしまい
次男次女車でやって来た祭り
お隣りもお酒の好きな老夫婦

羽曳野市

塩満敏

地下街の鯉は太陽あこがれる
心ブラで老妻にコーヒおごられる
顔も手も陽にやけている初議会
村祭り神話をダシにのんでいる

倉吉市

奥谷弘朗

言にくい事にも触れて詫びを入れ
限界と知って小さな穴を掘り

大山に意地と根性の句碑を建て
汽車弁の食える鈍行お気に召し

大阪市

天正千梢

理屈のやりとりでつじつま合うて来ず
トッ弁で信頼感を置いて去に
馬券的中安酒飲みに行き
巣づくり以上の志をみとめられ

美禰市

安平次弘道

新免許乗せる度胸に乘る度胸
だまされたつもりで買うて腹を立て
のし袋婦唱夫随で包まれる
隙見せて女は罌をたしかめる

反省会という名でつくる飲む機会

兵庫県

遠山可住

焼鳥の臭いが一番よい月見
マンガ読まぬ子の行く末が恐くなり
おみやげがないタラップの手が振れず

東大阪市

竹中綾女

一票を投じた人に汚職され
切り札を飲み屋で拾って来た策士
昔話から愚痴に変わって行く老婆
逆縁の喪の母皺が急に増え

倉敷市

松井俊風

枯芝に月日流れるひびきあり
吹雪く中しかと山小屋灯を守り
草枯れて山の夕焼け好きでくる
かなしさが襲えば虫の原歩く

宇部市

平田実男

名人の井の中の蛙とも言われ
飲み方で麻薬以上になるも酒
親不幸で泣かし嫁く時また泣かし
ハイジャックへも空港頭を下げて乗せ

堺市

藤井一二三

平井裕行君の結婚を祝う(二句)
旅遙か菊のこころを持ち続け
妻に似た人形を射つ旅の夜
瘦せた手へ検査検査で血を搾り
派手だとも云えずお若く見える柄

和歌山市

若宮武雄

老人の日今日こそボカをやるまいぞ
陰口に呆けたとされて労わられ
生かされていると気付いて明るい世
喝采へ天狗になりきっているピエロ

藤井寺市

児島 与呂志

よい歳をして云い訳にけつまずき
食べすぎたことにしといて座をすすめ
云いそびれ寝つかれぬまま寝てしまい
結論が決まっているのにまだ喋り

呉市

林野 甍光

残りくじの幸運を聞く雨宿り
焦れば焦るだけあなたの靴が減り
大海を見ている少年の目に戻り
いもずるを食べた男が文句言う

鳥取市

河村 日満

雪国の眼元さびしいこけしとも
一と畦に二つの案山子米どころ
ひとり来てひとりとはさびし中尊寺
なにをしにきたのかいなど呆けかかり

大阪市

河井 庸佑

知らぬ振りして聞かないと気に入らず
どうしても出さぬしっぱへくいさがる
勇退へ花道できた定退日
参観日気になる前の目後ろの目

倉敷市

野田 素身郎

終着駅近し決心まだつかず
雨追ってはるばる来たよな旅になる
夕焼けをしみじみ見たり一人旅
あばら家をきれいに見せてくれる月

柳井市

弘津 柳慶

バス旅行ガイド無視して睡りこけ
七五三の着物は祖母にまかせ切り
日曜市小猫も売りに出されて居
屁理屈を覚えて孫の小憎らし

今治市

長野 文庫

条文に味も素っ気も隙もなし
与党も野党も絵に描いた餅を売り
ため息をつかず青児の足の線
下手な引導であの世とやらへ行く

貝塚市

行天 千代

四つ角に住んで事故馴れしてしまい
髪梳けば胸の悩みも消えて散り
気がつけば私は一人風のなか
いわし雲そろそろ冬物出してくる

鳥取市

両川 洋々

政治を叱るきれいな一票俺も持つ
騙ますより騙まされろとはもう言わず
憲法九条ひとり歩きがしとうなり
スラム街政治の貧しさだけ目立つ

諫早市

原田 明春

ストリップ神代の代から引継がれ
目覚しが鳴り止んだような妻の留守
昇格へ今年も残墨という幕の切れ
招待も受彰もなく文化の日

西宮市 若林草右

朝の冷えラッシュに防虫剤も乗り
短冊にして新聞を読むラッシュ馴れ
日めくりのここから先は賞与待ち
世界地図双六に飛ぶハイジャック

米子市 石垣花子

仇花のように中年派手に着る
裁バサミ年季を入れた味で切れ
青い鳥求めて廻り道もする
限界を教えて呉れた坂の道

島根県 錦織文子

四国の再会（二句）

南無薬師結願秋の大窪寺
四十年ぶり肩抱いたまま泣きぐずれ
髪型を変えて小粋な秋にする
メートルを尺に戻した智恵に生き

和泉市 西岡洛醉

善の道教えただけの母で逝く
へそくりをはたいた孫の汽車走り
まだ燃える火を秘め寡婦の道をゆく
積木つむだけの人生とは悲し

倉敷市 藤井春日
なりゆきに任すほかない岐路に立ち
ポックリと逝きましょ老人話し合い
屋台曳く老へ師走の風無情
案山子など恐れぬ雀よく肥り

和歌山市 津田与史
話しかけたいような大きな月に会う
九十まで生きる自信が崩れ出し
戻る道ない人生と知りながら
白い画布へ塗る色がない日が続き

鳥取市 大塚豊生
再会へ虹を背負った友が来る
燃えている瞳を意識して切り出せず
甘えると見せて心の牙を研ぐ
世渡りのコツを擱んで再起する

倉敷市 稲田豊作
亡き妻の終の笑顔がこの写真
秘めていた亡妻の小函はそのままだに
夢枕浄土の居心地良いと言う
サラリーを問うて答えて恋が冷め

竹原市 時広一路
傘をさしかけても黙って横を向く
千羽鶴心の中で折り続け
正座して黙して心まだ揺れて
人間を孤独にさせて海深し

守口市 羽原 静歩

パリュームを三度吞む日のはかなさよ
ベレー帽明日へ続く旅心
人は去り人は来たり末法のページくる
定期券生きねばならぬ業を知る

東大阪市 斎藤 三十四

城下町土塀に密柑の顔が熟れ
流れ者飯場の月に母おもう
未練すてた寡婦の指太い
悪筆の方が効果のある嚇し

和歌山市 吉野 富子

完全な夫と信じている暮し
平然と欠席女の強い自負
会釈するライバル意識眼差しで
点々と口止め線となつてゆく

姫路市 大原 葉香

のろし上げ男の意地をみせておき
日の恵み謝して稲田の暮れ急ぐ
一味がちがう年季へ嫁素直
よく喰べる口あるくせに無口なり

大阪市 神夏磯 道子

廃坑を季節の花が咲き乱れ
子を包む愛の袋が破れそう
あの人だからダイヤがよく似合い
反対へ出雲の神の助け乞う

米子市 小西 雄々

足音で看護婦の名を知るベッド
秋風に女が奇麗に見えるはじめ
もてなしの高価な布団に寝つかれず
人生の厳さ知つてゐる夫婦箸

鳥取県 鈴木 村諷子

玄関に錠して寝たい日もありて
配膳に男廊下へ追い出され
秋の空いやなことなど忘れよう
こじつけと見えるこじつけしか言えず

大阪市 柳原 静香

きこえない耳を素通りする噂
冷蔵庫静かになつて秋深む
ドラマ見る夫の背中にある孤独
歯を抜いた顔へしみじみ齢を知る

西宮市 藤村 べ女

敵味方満場一致に酒が要り
枯葉舞う心の隅に抱くあなた
胸に抱くひとり濡れたい京の秋
倒産へ殊更寒い師走風

西宮市 島居 百酒

墓洗う暑さへ骨は冷えたまま
足萎えの暮らしへ利下げ追つけず
仲裁へなだめる嘘は責められず

桜井市 岩本 雀踊子

少し冷たい男の言葉を愛と云う
横顔に女のかくした歳がある
子沢山隣りの喧嘩笑えない

大阪市

西森花村

コンニャクもねぎも花形今日の膳
売出しの今日がしまいの抽せん場
せきすればくしゃみで答える老人会

枚方市

宮川珠笑

雑草の居住権など主張せず
売店の不機嫌施すように出す
両替えのためのたばこで睨まれる

宝塚市

小畠無聖

箸目を親子雀が蹴ちらした
覚悟した手術だけれど気が弱り
粥する音も淋しい秋の朝

平田市

久家代仕男

のんきそな親に苦勞の火が消えぬ
励ました方も似通う過去をもち
政治家が何さと目刺し焼く生活

氷見市

関美子

銀鱗に越中しぐれ 冬はかけ足
難病舎 まだ生き神が放さない
過ぎ去って見ればひととき四季無情

守口市

野呂右近

本読めとささやく様に秋の雨

手を掛けた石皆崩れ登られず
逆流の血を静めるに旅の風

岡山県

竹内翁童

待たされたあげくの果の不採用
腹の立つ社命私心は秘めて聞き
見栄坊の男の旅の土産物

豊中市

戸田古方

丹後半島

車窓の青虫よく見れば窓の外
しんどなるさかい歩かずバスを持つ
ようけ鷗いるな仲良うやつてるな

堺市

伏見茂美

愛不信夫の顔見ぬ日がつつき
明日のプラン半分出きたら良しと寝る
秋の虫聞いてかお風呂の長いこと

松原市

玉置重人

タイムレコーダー如きに足許見すかされ
午後十時まだ止まり木にいるピエロ
息子への宛名が怖い女文字

米子市

増田竹馬

名鐘の余韻を運ぶ秋の風
結ばれて今日から築く愛の城
また癒り死下手さんの名をもらい

唐津市

新岡回天子

月見酒すすきが欲しいと思う夜

此の子一人未来をかけて賃仕事
遺族年金あってあの人むすばれず

米子市

佐伯越子

古文書を見付けて読み入る里の蔵
名前だけ見れば美人を連想し
残り火を抱いて寡婦の意地を見せ

島根県

大森孝華

旧姓へふりむく笑顔久しぶり
母を待つ新居白菜漬かる頃
明日へ散る木の葉今日の風に媚び

大阪市

神谷凡九郎

眼を閉じてても罪は消えないヨ
トニカク朝なんだ昨日は終ったヨ
自分と話すホントニ馬鹿げた事だけど

神戸市

仲 どんたく

客観的には老人ならん 敬老日
ようこそと曲尺 君ケ代 握手する
十五夜を抱いて湯船の独り時

松山市

谷 のぶお

ことごと寝酒は妻の手を借りず
退職の抽斗きれいに拭いておき
水道の漏れる音あり妻の留守

玉野市

小谷仙山

小さい秋見つけた萩のこぼる道
あれ以来ですと懐かしい国訛り

落葉して来春までの一ねむり

大阪市

本間満津子

真実の冷たさうその暖かさ
この辺りふと立ち止る老の坂
おじぎしてしてして葬儀やっと済み

大和郡山市

森田カズエ

奉仕品なんてきこえのよい言葉
下手な字で努力と書いて気がめいり
ギャングルの好きな男の神詣り

大阪市

室谷徹舟

講演に馴れたマイクが吸いつける
私も困っているから社会鍋
雪かぶり杉は今年の背比べ

橿原市

岩井本蔭棒

星屑の中に神話を探さんか
野仏のお顔もしまる秋の風
風有情孤老の破れ戸を叩く

岡山県

直原七面山

髪梳く妻の腰の豊かさ
邪恋の果ての精算心中
恋に破れて心ぼろぼろ

呉市

榎田英詩

ゴム毯よ調子に乗って何処へ行く
戦争を知らない者の口が過ぎ
貧に馴れ夜なべの続く糸切り歯

大阪市
名前負けしたか一と旗もよう揚げず
長き人生やすらぐ港欲しくなる
如何せん食い意地が張る恢復期

東大阪市
桑原喜風

庶民には遠く松茸通り過ぎ
豊作に雀満腹して踊り
新聞と眼鏡セツトに知る老化

大阪市
横地雅風

古物商に座れば店主が古く見え
ついでです老いの仏心街を掃き
礼装の女は礼装の話題持ち

京都市
山本規不風

旗立てて走ってる子よ躓ずくな
白足袋が土間を舞台に舞い祝う
上向いて止まらぬ涙筋一つ

鳥取県
林露杖

野仏の袖に纏わる花芒

コスモスの花の揺らぎに想うこと
損のない役だけ上手く買って出る

大阪市
藤田頂留子

なめくじのなわ張り粘液つけて行く
ドラマもうすんだか銭湯混んで来る
食欲の秋串かつを買い足さず

兵庫県
河原みのる

休店日ピシヤリと閉めて値上げふだ
読めたふりそしらん顔とで額の文字
ひい孫へ戦争なしと言いい切れず

仙台市
川村映輝

真実は一つ見る目で右左
平等に子らに割り振る母の愛
筆不精ハガキに大きな文字で書き

鳥取県
清水一保

灯を消せば虫の鳴く音も丸く寄り
線香の煙祖先が語りかけ

本
本田恵二朗

見合席虫も殺さぬ顔でいる
おちよほ口あれで結構召し上り
蟹気楼描いては消してまた描いて
両足の老化を認めざるを得ず
金婚の門がはるかに見えそめる

正
本本水客

メナム川(タイ国)

飲んで洗って聖なる濁り悠久に
水上生活の雨季はひねもす動かずに
川に建つ家おとこは水を見すすわ
果物を売る舟ゆっくり来て離れ
水上マーケット川に生きてる人の顔

菊
沢小松園

中年の魅力人妻とゆうハンデ

六十の尻に合う椅子見つからず
本当のことを言うから叱られる
浮草も故郷の方へ流される
叱られたスパイ本当の顔になり

借景の紅葉があつて錦鯉
音吐朗々祝辞の造花めき

時間通り貸しての方が来た不況
退院の妻には家中じじむさく

祝 結 婚

夫唱婦随夫婦唱夫随の旅であれ

奥飛蟬の鮎の逆立ち炬辺ぬくし
あかあかと燃ゆる炬の色旅の色
観光客の一人朝市へ舞い戻り
民宿の鮑コリコリ音がする
スイッチバック昔はそばの旨い駅

桃の花桃の実桃の核みなわたし
背徳や三面鏡の顔無数

真実や二度は覗かぬ万華鏡
曼珠沙華摘み落したは行き倒れ
美しい丘 日本にキリストは出ぬ

迎合も妥協も不要老の坂

川 村 好 郎

西 尾 栞

橘 高 薫 風

若 本 多 久 志

捨てるものみな捨て終点ま近なり
自らを慰めている孤独 われ
紅葉も散ってしまえば汚ならし
読み切れぬ蔵書抱えて道遠し

地球より重い人命威嚇され
要求を満タンにしてハイジャック
断崖の底念仏が口を突き
円高の重しの下の小企業
北風の日溜りにいた赤トンボ

日本はそんなにいいかドル相場
シャボン玉二五〇でハレツする
人間の戦い囲っている地球
せり合いの歴史にふわりふわりドル
煩惱の黒点予報に乗せられぬ

一年を顧みる日を持ち合わせ
見られたくない晩酌の食べ残し
ふんざりがつき欠席の通知出す
七十年近くを飲んで食べて無事
ドラマとは知りつつ涙湧いてくる

伊 藤 茶 仏

尼 緑之助

浜 田 久米雄

題詠がいいか雑詠がいいか

東野大八

どこの柳誌だったか記憶にないが、川柳の近代化を図る意味で、「題詠」をやめて「雑詠」一本にしてはどうか、の問題提示を行っているのが眼についた。

わが柳界は周知の通り、あらゆる作句の場では「題詠」一辺倒である。時には趣向に走って「難題」を持出し、お立会いの当惑を誘う遊びもある。一種のこれは、明けても暮れても題詠一本ヤリの、マンネリ打破の居直りとも受けとられるが、もとよりまともなものではない。

「席題が雑詠となると作りにくくて……」などという愚痴は句会でもよく耳にすることだが、川柳の題詠とはどこからきたのか、昭和二十二年十二月号の「川柳雑誌」で、山

路関古はつぎのように述べている。少し長いが再録しよう。

―川柳はその形式の上から云えば、独立化に際しても、前句に依存するということからまず具体的に前句附というものになって現われた。それが亡びて後、今日の川柳の題詠となったのである。

川柳の題詠は、方便ではなくて、実は芸術上重要な意義があるのである。「出産」「長靴」というような題が出るのは、その意義に触れているのであって、それは前句附が川柳に移行する時に、必然的に現われてきたものである。

呉陵軒可有が前句附を廃して、独立川柳を創始する時、やはり前句の替りになるものが

なければならぬということを漠然と考慮した。彼はよき理論家ではないから、その間の消息を明瞭に分析することは出来なかったらしいが、とに角も「景物」ということを提唱し「猿田彦」「目出度し」「紫」「矢立」「玄関」「料理人」以下三十ばかりのものを例示している。（柳多留二篇末尾参照）

そうして前句が失せて後は、右の如き景物を主題とせねば、佳句は生まれないであらうし、従って柳翁の選にも入り難いであらうということ警告している。これが即ち題詠の起りであり、平句としての川柳の荷うべき運命を指示したものである。

前句附は附合趣味を基調とし、心附、句附というようなものが、微かながら存して居り、これを貫くものは不即不離の調和であった。然るに題詠は「結ぶ」ということの趣味が土台であって、必ずその文字を詠み込まなければならぬことになっている。

不即不離よりは、むしろ象徴の趣味を立てたものであり、これが後に多少とも芸術的に発展して今日の川柳となってくる訳だ。

山路関古は、右引用文に先だつ個所で、俳句の在り様にふれ次のような説明する。

「ともあれ俳句には季というものがあると

御合点ありたい。そうして切字というのは、十七字を以てて独立詩歌の体裁をととのえる為の手段であり、ピリオドに相当するものである。これが俳句の原型であって、十七字、季、切字の三要素の他には、なんの拘束もないのである。これから出てくる特色としては俳句には題詠がないことである。句会などでは整理の都合上、仮りに季を以てて題としているのであるが、所謂題詠ではない。(中略)俳句は独立性を主張するものであるから、題などで縛るということは、その本質と相容れない。何を詠おうと全く自由であるのだ」

ところで、昭和五十年一月号の「俳句」

に、「芸と想像力」と題する安東次男と飯田竜太の対談がある。この中で虚子再評価をめぐって、虚子編の「ホトトギス雑詠集」などの問題性を再検討すべきだとの安東の発言に対し、それを受けて飯田がこう発言している。

「何んで芸が磨かれたかという、あの当時は句作といえは題詠ですね。題詠というのは芸を磨くのにはいいんだね。いまの俳句はいろいろ素材があるんですけど、意外に境地が狭い。想像力が貧困ですね。題詠となると、想像力というものをフルに發揮し

ますからね」

これに対し安東がこう補足する。

「一と同時に、あの一つの見方だとか、言葉の使い方だとか、そういうものをどうしたらおもしろく活かせるか、と考えたわけでしょう。題詠はむしろその一つだと思う。ところが現在では、何かある素材を発見すると、それに自己主張をどう盛りこむかということしか考えていないらしい。当然、なりふりかまわず言いたいことを全部そこに持ち込むということになって、結果はともにごたごたした表現になる。言いたいことはこういうことらしいとはわかる、しかし一向におもしろくない舌足らず、というような句が生まれる。その違いはたしかにあるように思う。あきらめが悪いんだなあ」

と語り、ここから「つくる意識というものを捨てた姿勢」へと話が展つていく。

この対談は、以上の冒頭部分に主題を出合いがしらに出した感じであったが、当時、俳壇では相当な反響を巻き起したときく。

この「反響」というのは、飯田竜太の発言内容にある。俳句大衆の思い込みは、これまでの吟行や囑目詠でない題詠推賞に、禁断の木の実を許されたほどの愕きを味ったところ

にある。俳句は、その伝統からしても写生一筋で作句するのがたてまえで、想像力が俳論に姿を現わしたのはごく最近である。どうも俳句の世界は、求道的なニュアンスが濃ゆくて、あそびの芸にはなじみにくいというより反発する面がつよい。

うぬばれではないが、以上引用した対談内容に関する限り、俳句よりとくに先へ行っているのが川柳の題詠方法である——ということとを、筆者より読者の皆さんの方が強くそう感得されることだろう。

それといま一つは、安東次男の発言した中に「何かある素材を発見すると、それに自己主張をどう盛り込むかということしか考えない。当然なりふりかまわず言いたいことを全部そこに持ち込むということになって、結果はともにごたごたした表現になる」という個処を注目したい。川柳界の難解な詩川柳は、結果において、右発言内容とそっくりではないか。いずれにしろ、他人の口説ばかり引用して恐縮だが、川柳も題詠で近代的な磨きをかけ、どう川柳を近代詩歌の人並のレベルに引きあげるかをまずは考えるべきではないだろうか。

蕃敵はにくさにもくしなつかしき

「この一目を待て」「イヤそれは待てぬ」「そんなケチなことを云わずに待ったらいいじゃないか」「何かケチだ」「ケチだからケチだと云ったのがどうした」と赤目を釣合ってから暫く往来をしないが、ものの二、三日も離れていると、ああは云ったものの別に喧嘩しなくても済むことなんだ。どうしてか一遍覗いてやろうと出かけて行く。片方も退屈

麻生路郎選

評釋
古川柳の味

八木摩天郎清記

で閉口しているところだ。一人で石を並べて見ても直ぐに飽きてくる。丁度困っているところだ。二人は顔を見合わして黙って盤面に向い合った。

パチリパチリという石の音がやがて外へ洩れて来た。

孝行に売られ不孝に請け出され

親孝行のために売られた身が、親不孝の人に請け出されたというので、その対照の面白さをねらったのである。

今後はいたしませぬと乳母がいふ

こどもがものを毀す、叱られても決してあやまろうとしない。そこで乳母が代って今後は決していたしませぬからゆるして下さいとあやまったというのである。

掴み得て妙である。

これ小判たった一と晩居てくれる

雲と散じ霧と消え、しばしも脚をとどめぬのがお金の常、そのお金のために、昔からどんなに多くの悲喜劇が、演じられたことである。これ小判たった一と晩居てくれると、ひそかに願った町人の心を卑しい心の持主として誰が非難し得よう。

子を持つて近所の犬の名を覚え

子どもがなると、近所と没交渉であるが、子どもがあると近所の犬の名までも覚えるというのである。実際その通りだ。今も昔も少しも変りがない。

此部屋に一人寝ますと氣をもませ

若後家の匂だ。何んの気なしに、この部屋に一人寝ますと云つても相手はなんだか氣がもめるのだ。若しや自分と氣があつてあんなことを云っているのではないかしら。

産あぐく良人使ふがくせになり

産後はうごいてはいけないというので、じつと寝かされている。その時には、ちよつとあなた、ちよつとあなた、となんでも良人が使われるが、それが習性になると女天下になつてしまう。

さうであらうさうであらうと里の母

夫婦喧嘩がはじまると、女房は里へ逃げて帰る。そしていろいろと、里の母へ訴える。

母は子にあまい。姑さんがきつい人で斯ういう無理を云われると云えば、そうであるうと云い、それを良人がかばつてもくれないで母親の味方をして妾をいじめると云えば、そうであらう。それは可哀そうだ、いくら自分の娘ではないからと云つてあんまりだと、すっかり里の母は娘の味方になる。親ごころにかわりはないが、多くは盲愛であることを穿つたのである。

里帰り夫びいきにもうはなし

花嫁が里帰りました。親や兄弟が寄つて、嫁入先のことを何彼と尋ねると、もう夫びいきに話したというので、よく穿った句だ。

姑の日なたぼつこは内をむき

昔から嫁と姑は仲が悪いのが通り相場だ。嫁のアラ探しという訳でもあるまいが、姑が日向ぼっこをするにも内の方を向いて眼を光らしているといったのである。

邪魔がられますとしきみを選びかへし

お寺詣りをした姑が寺の門前でしきみを買うのに、うちに居ると邪魔がられますので、斯うして墓詣りばかりしていますと云いながらも、しきりにしきみを選びたおしている。どうせ墓にそなえるしきみであるし、何れは枯れてしまうものではあるが、それを少しでもいいのをと選りかえしたというのだ。

人間の慾は墓へ行くまでも際限のないことが知られる。

(つづく)

俳風柳多留廿五篇研究

— (十七丁) —



清 博 美

清 博 美・青 木 迷 朗・室 山 三 柳
八 木 敬 一・西 原 亮・入 江 勇
紀 内 恒 久・鈴 木 黄・岡 田 甫

294 つれ／＼はいゝがまいらせ候がきつ

清―兼好法師の著した『徒然草』は、すぐれた隨筆集であるが、その中に武蔵守高師直のラブレター代筆の項がある。これが『徒然草』の欠点であるとの句か。

兼好はあのつらでかとなぐり書き

七・14

ひよんな代筆に兼好とつかまり

四七・37

八木―はつきり知らないのですが、徒然草の中に代筆の項があるのですか。

つれ／＼の外にまいらせ候も書き

二〇・6

西原―代筆の話、『徒然草』にはない。あるのは『太平記』。兼好は晩年、時の権力者足利氏や師直に近づいているから、実際にあつ

たことかもしれない。洞院公賢の『園太暦』貞和二年九月の項に、「兼好法師入来り武蔵守師直ノ狩衣以下ノ事之を談」とある。

室山―同。『徒然草』はよい隨筆だが、『太平記』の「兼好と云ける能書の遁世者を呼寄て、紅葉襲の薄様の、取手もくゆる許にこがれたるに、言を尽してぞ聞えける」ことをさせられたのはおもしろくない、というのであろう。ちなみにこの手紙は「あけてだに見給はず、庭に捨られ」たので、「今日より兼好法師、是へよすべからず」といったことになる。

岡田―同。

295 はつ句の人倫ふぐの酒もつて来ル

清―発句に遊ぶ仲間の所へ、ふぐ料理のさそい。そこで酒を持って訪れ、共に酒宴に興じ

るという意味だけの句か。

八木―賛。発句には「季」が必要である。阿仏尼という人が九月みそかに

今日ははや秋も終りとなりけり
と詠み、次の十月一日に他の席で、
今日ははや冬の始となりけり
と詠んだという話がある。

西原―人倫はよく用いられた分類法。ここでは発句をやる連中というほどの意で、とんだ風流人の一面をとらえたもの。

艘はいやかとった一筆

武初・3

室山―同。「人倫(の詞)」という俳諧用語がミソの句。

入江―酒屋の小僧。樽ひろいの句。

名句にはなるとはしらぬ樽拾ひ

雪の日ハ文台に乗る樽ひろい

二九・3

名句とは「初雪やこれも人の子樽拾ひ」、作者は沾徳。

岡田―入江説の通り、フグを食べる席へ、酒屋の御用（すなわち樽拾ひ）が酒を届けてくる。

296 傾城及び百姓もくろふなり

清―吉原遊女が苦勞するものの一つに、八朔の紋日がある。当日は、白無垢を着なければならず、この調達に大変な苦勞がある。ちょうど同じ頃、百姓は二百十日の嵐に氣を配らなければならず、これまた大変な苦勞である。

八朔が百姓よりも苦勞なり

米屋でも傾城屋でも物日なり

室山―贊。「八月」がともに苦勞。

岡田―贊。

297 羽団扇であふき馬さまきついもの

清―不明。

青木―「馬さま」を『写真版多留全集』でみると「高さま」とも読める。

『川柳辞彙』によると、高時は鎌倉九代の執権、北条高時。相模守たり、入道してから宗鑑と称した。田楽を好み、鎌倉に在る各大名に身分相應に田楽法師を二、三人づつ預け置いて、宴を開く毎に之を舞ふて居る処

へ、十余人の田楽法師が来て共に囃し舞ふたが、後でよく調べるとそれは異形の天狗の業であつたという。

西原―なるほど、青木氏敬服。

入江―祭礼の神馬かと思つていました。

おそろしいおんど羽うちわ口へあて

岡田―青木氏の新発見に敬服。北条高時の田楽舞が正解。

298 君命をそむいて奥で誉られる

清―腰元であろう。殿様が手を出そうとしたのだが、それをこわつて、誉られる。

八木―贊。草履取かとも考えたが。

紀内―一般の下女でもよからう。

わろがたい下女君命をはづかしめ

と同じ洒落。真面目に考えれば、本当の君命ならそむけないはず。

青木―紀内氏さらに適。「真面目に云々」では、思わず笑つてしまった。君命にそむかぬわろがたからざる下女もさがせば見付かる。

君命を恥づかしめざるは相模

西原―礎賛。腰元であろう。

室山―同。腰元でなければ、「奥」が生きて来ない。

岡田―大名屋敷の腰元に贊。

299 あつかいが済でひなたへ二人り出る

清―「あつかい」とは事件を仲裁すること。

いづれ、男女の仲のことであろう。今まで、こそそとやっていたことが、関係者の間に和解が成立し、晴れて人前に出られる。問男の句か。

八木―贊。

あつかひて村間男ハ五俵出し

室山―間男より密会を続けていた男女で、晴れて認められたのが、「ひなたへ二人り出る」のではないか。

はらんだでそうだんずつかく出来

入江―同前。間男と限定しない方がいいようだ。裏に日陰者のきかせがある。

岡田―同。

300 二階の窓にやことなき盗ミもの

清―故事思いあたらず、乞ふ教示。

青木―「やことなき盗ミもの」とは、具体的にいえば何なのだろうか。それが不明。

西原―駈落ちの女。勿論男より身分のある女性。

入江―欠落者の大家の娘。

おやぶんの二階住居にぬすみもの

岡田―同前。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

河村日満

夢二描くある底辺の女の眼

阿萬萬

一世を風靡した夢二の絵には、確かにこの句が指摘する女の瞳である。どことなく泪に濡れた、いや風情にぬれたような、というべきかも知れぬ瞳に、人々はひきつけられたのだ。と僕は信じている。この句の「底辺」の言葉が、特に夢二の絵を知る僕の心をぐっとひきつけさせる。

人形の首なり接着材でつき

金井文秋

失業者が百万人を越える。という現在の不況が頭にあつてこの句を観る限り、「人形の首なり」であつたり見すごせる筈はない。この句の裏にひそむものが、ひしひしと痛いほど僕の胸を衝いてくるのだ。

世に馴れて女の日課尖りすぎ

大峠可動

女性の現在の日課は、新聞紙上でみられる

とおり。下五の「尖りすぎ」で現在の世相がよくにじみ出ている。と感ずるのは僕ひとりか。

去年とはまた違う風秋の風

津田与史

去年は本当にどえらい目に遭つた。という気持が上五から中七にかけて語りかけている。そして今年はまだなんと有難度いことであろう。という心が言外ににじみ出ている、しみじみさせるものがある。こんなリズム感に浸りきっていたい。

白旗をいつでも出せる夫婦仲

水粉千翁

相当古い夫婦歴をもっている二人の、日常会話までがきかれそう。労わり合える夫婦の労わりの言葉は、いつでも「白旗」を用意して待っているものだ。

お日様が昇ると世間しらじらし

谷垣史好

全く全く。夜中には人間何をしているものやら、それが夜が明けると、ころつともう一つの面をつけて「おはようございます」なんて、笑顔までつくつてね。

ところで最近こむつかしい文字を並べたてての句が多くなつてきている中で、何か肩すかしでも食つたような「お日様が」なんて言葉にぶつかったんですが、こんな句もまたいいですね。

実印へ妻も覚悟の正座する

大矢十郎

やはり川柳は、想は古くても中味で勝負す

るものであることをはつきり悟つた。

兎も角妻までが覚悟の目を閉じねばならぬ情景を、下五でびしりと締めくくっている手腕は見事。

空気が吸つても水を飲んでも肥える質

不二田一三夫

わが家にその見本があるの、おもしろい口から吹きこぼれた。食べて肥えるのは当然だが、本当にお気の毒な質だと同情これ一しおです。特に女性に。

いちばん星すんで掃除機廻り出し

錦織文子

朝の連続テレビ小説を、妻や嫁が観たがるのは当然のこと。と理解して、わが家でもお互い放送時間がくると、呼び合つてテレビの前に。勿論わが家の場合も掃除、その他はあれとまわした。この句「掃除機」でその辺りのことを匂わせるあたり、心にくい手法だ。

子守唄母には母の節がある

野田素身郎

母の子守唄をきいて育つた子どもの心に、いついつまでもあるのは「母の節」であり、この句の見逃がせぬところでもある。

この他次の三句を採つたが極楽ももっと宣伝したらどう

ふり向けば足跡さへもないきのう

河原みのる

健康をひっさけて行く同窓会

江城修史

福浦勝晴

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

高杉鬼遊

一億の人がいながら誰も来ぬ

文川一念

この句の風刺は痛烈である。孤独の寂寥を逆手にひらき直った作者の逞しさは見事だ。日々精進の結果この句境を発見できたものと思う。マクロとミクロの組合せに妙がある。不発弾秘めて林檎は真二つ

納史葉

林檎はエデンの園の昔より愛と性を内包している。異性に初めて接する「不安と恍惚」この感性は生きものにとって貴重な瞬間である。「真二つ」は緊張の高まりから発する作者の決断とみる。

ユニホームきれいな方が勝っており

北勝美

この句の味は微妙で複雑である。当然のようである。どちらの位置からでも納得できる「だまし絵」の雰囲気。騙され怒れない皮肉がユーモアを誘う。

人參を切るとレモンを切りたくなっていく

すが かつこ

人參の持つ日常性からの脱出を、レモンの憧れへ飛躍させる願望句とみる。習慣的な物の見方からの脱皮は詩へのいざないである。妥協点ちよっとずらしてみませんか

川上富子

表現は平易で未完成の感はまだぬがれないが変に技巧かった句よりこの方が良い。技巧も一応こなせる作者が一句として発表した価値はある。

記念品呈上とありゆくとする

野田君枝

人間態を赤裸々に虚飾をかなぐり捨てた生きざまが、堂々と正面を切る大胆さに驚く。作者が女性だけに瞠目される。

実の入りの悪い扱ほど浮きたがり

岩田三和

教訓的に解釈すると川柳の味が消えてしまう。浮き上る扱を悪と見るのは人間からの視角であって、扱自身は悪いと思っていない。自然現象を疑人法で扱ったところにユーモアがある。

皮肉にも見える社長の作業服

欄蘭

作業服の社長を立派だと感得する一般常識論への反駁に作者が生きている。皮肉に見るのは川柳人の眼である。

アクセント変えてあなたを動かせる

田中紀美代

「夫を働らかす操縦法」近頃の婦人雑誌の

特集目次を見るようで楽しい。実践するかしないかわからないが、夫婦円満の秘訣は妻の演出によるところ大である。

美しい誤解で綴る結婚式

杉浦婦美子

所詮夫婦は個と個の営み、信じ合い疑いながらの日々の積み重ね。信は陽であり、疑は陰かも知れない。全面的な信はかえって不安なように思える。「美しい誤解」に結婚を迎えた重みが沈潜されている。

もう言わぬ愚痴が今夜も出てしまい

北野久子

日常性の中で時には悟っても、刻々の移ろいに愚かな所業、言行の現われるところが人間的で愛ほしい。人間が神や仏になった時ほど味気ないものはないだろう。

面倒なことは忘れて星になる

広富白峰

十月二十九日野尻抱影氏逝く。星をこよなく愛した氏は今彗星となって遠く天界へ昇ってゆく。名付親として太陽系第九惑星ブルート冥王星と会い何を語るだろう。

補聴器懸けてまで雑音を聞きながら

清水金太郎

情報過多の中から真実をひき出す至難さが伺える。いつそのこと三猿主義に徹したいところだが、そうもならぬところに現代人間の弱さがあるようだ。

左記はチェックした句。

絵心があればと思う富士が嗜れ綺麗こと言つても所詮金で済み 悠泉 節夫



菊沢小松園選

きつぱりと切れてまあいとお月さま
只踊るだけで深味にはまらない
松江市 梅本登美也

控え目に抱負を語る紅一点
警察へずかずかは入る出前もち
足組んだ女言いたいことを言い

橋本市 森脇善彦

コインロッカー花の都で何もうた
振り向けば若い命が散っていた
凡人の汗一燈を絶やすまい
新聞の隅で許せる父を見たい
敗け犬の尻尾きれいに意地を消し

和歌山市 西山幸

諦めた耳が時々嘘を聞く
許せない自分へ鞭を持ち変える
動く絵の泣く日笑う日風の中
錠剤の奢りに負けて病んでいる

片方の耳はうわさを聞く耳で
脇役でいたくないから主張する
三重県 川上富子

四季の花茶の間に飾って妻でいる
保護色となって夫の影にいる

八尾市 納史葉

換気扇さんまの詩は知らぬなり
尖った風ばかり逢う風見鶏
遠い日の息でふくらむ紙風船
左手でつかむ倅だつてある

大阪市 堀口欣一

飾職こも三代目は継がず
島の名は知らずともよし秋が晴れ
それぞれの人生を持ち夜行バス
星の位置北斗七星だけわかり

節穴に人の心が覗かれる
名古屋市 大林曲ん手

一と杓の水で静まる砂もあり
生甲斐を見付けたまでのひとり言
給料は権利両手で受取らず

寝屋川市 江口 度

遠慮ない人妻だからもて余し
ドラの音が星の冷気を吹つとばし
ミキサー車走る田舎も遠くなり
色街の思い出苦い酒でした

島根県 飯塚 虎 秋

逆境の中の積木は崩れない
下り坂石のころがる果を追う

雨の日は雨に用ある頬被り
それぞれの夢を積んでく朝のバス

熊本市 有働 芳 仙

去るものは追わず一人切りになり
絶景へ終止符打った比翼塚

ハイジャック等に血税もってかれ
人形を抱かせ迷い子の気を散らし

新潟県 高野 不二

値切られる分は見込んでまだもうけ

自分だけ若いつもりでクラス会

事故の写真の中の一人がつかくし
ゴキブリも出演させるコマーシャル

八戸市 安田 絃

借り着には見えぬ笑いの良い日柄

食欲のない子も叱る子沢山
近道がないから人生歩くのさ
紋付の民にも天皇迎えられ

倉敷市 藤原 健 二

凡人の証し馬鹿にはなりきれず
ドレミファが一寸狂った胸の翳
腕白の胸で跳ねてるアップリケ
万国旗世界平和の夢でゆれ

岡山市 砂田 静 佳

通せんぼする智恵蜘蛛に借りて来る
同じ釜喰った写真にあきが来ず
アドバラン自由を謳歌させぬ紐
流れ星暴走族の一人かも

出雲市 石倉 美佐子

嘘ついて地獄の中に居たわたし
いらだつ日博多の帯は横を向く
シグナルの赤を教える人もなく

竹原市 古谷 節 夫

登るだけ昇って降りる道が無し
七転び八起きダルマが睨んでる
ごろごろと流れて石も角が取れ

羽曳野市 麻野 幽 玄

妻子には見せぬ笑顔がある写真
スナップのどれも何かを提げた妻
燈を消せば話題も変る旅の宿

鳥取市 岸 本 無 人

頼まれる前にやったら疑われ
末っ娘の縁談無口の父になり
よく酔うておられましたと請求書

尼崎市 中 谷 利 美

信用はしてるが一筆念の為
割勘でまだ友情の域を出ず
又の日にしたらと母の助け舟

和歌山県 中 根 勇

落城の哀史も知らず景色褒め
出世して故郷に遠い空に住み
四面楚歌明治の孤城まだ落ちず

七尾市 松 高 秀 峰

杖のいる退院本当によるこべず
菊日和老人ホームの運動会
先生も叱り加減のむつかしさ

和歌山市 浦 野 和 子

眼鏡ごしとくに女を捨てた顔
振り向かぬ歩巾に未練の目がする
限界を知った日からの失語症

和歌山市 松 原 寿 子

人形の瞳が濡れている孤愁
飾らない素顔へ心置いて見る
歯車が合わないままに片想い

和歌山市 坂 口 公 子

秋風に冬がこっそりついて来る
煙突をはずした借景ほめておく
看板の様な櫛を読まされる

大和高田市 岸 本 豊平次

井戸端に負けず嫌いがいて白け
しゃあしゃあと受話器の妻に感心し
負け犬になりたくなくて矢をつがえ

倉敷市 斎 藤 通 風

枯すすき少女 女にして返す
先進も後進もない祭馬鹿
軍歌あるだから老父も酒となる

宇部市 樋 村 天 流

盛装で出る日の祖父母明治の威
それからは嘘も方便世に敗けず
二人連れ組む手握る掌空は青

吹田市 藤 原 世史春

蒲団干す妻の背中の小さすぎ
ハイジャック親ごの心になってみる
十六億で百六十人の命買い

富田林市 中 村 優

口笛のリズムに甘い花と蝶
満たされぬ心を盗む占師

香川県 田 井 教 之

核心をつく一言はしまつとこ
おもかげよ十三回忌の流れ星

坂越えて夫の愛を確める
一本の松茸うすくうすく切り

読み耽る内に推理の渦の中
正直になれと鏡の顔が言い

若い積りへ敬老の日の招待状
ガイド嬢の声七三に居眠りし

故郷の土踏みしめて栗ひろう
三味の音が川面渡れば風となる

故里の地名が見えて読みふけり
裏長屋遅れおくれに鳴る時計

あんた方どこと訊くのか寺の鳩
先斗町路いっばいに出勤持

六輔の執念で尺廻り
暑中見舞電話ですます筆不精

谷底に平家部落のひと握り
金持ってきたかとノッケから聞かれ

松原市 北野 久子

出雲市 高見 鐘童

大阪市 欄 蘭

海南市 牛尾 緑楼

大阪市 北 勝美

大和郡山市 今谷 紫園

岸和田市 清野 こう

岸和田市 池田 香珠夫

岸和田市 池田 露子

晴れた日は渴きに耐えている小菊
咲き誇る大輪を切る目をして

踊りなどとうに忘れた雀老い
今日もまた重さに負けた人の近く

新しい家族お腹で待つ出番
乾杯のコップ浮世の義理を知る

ケチだとはすでにわかつているデイト
このへんを跨げと綱のたるみよう

今日もまた愚痴をこぼさぬカード打ち
定年後氣にせぬ妻に救われる

逆らわず賢く生きる知恵もなし
後戻りさせぬと朝日が又昇る

中パッパジャーもおふくろさんの味
ドリンクと船酔い止めで出発す

定まらぬ焦点女がしゃべり出す
ふるさと呼べば雲が流れゆく

天皇杯白手袋がよく似合い

鳥取県 広富 白峰

岸和田市 島崎 富志子

松江市 本庄 快哉

橿原市 西本 保夫

高松市 溝渕 美紀子

寝屋川市 柴田 恵美子

出雲市 吉岡 きみえ

青森県 波 ただお

天皇に手をたたかせる子の演技

鳥取県 金川 満春

世の中の善悪どれも紙一重
名陶の壺なでられる肌触り

鳥取県 加藤 茶人

子を庇う爪にマニキュアなど要らぬ
とりあえず良かった急所だけ外れ

東大阪府 崎山 美子

あの人が今も生きてる日記帳
悪筆を感じさせない熱い文

今治市 和田 宏

幼虫の孵える日を待つ子の日誌
泣き声でおしめと乳を聞きわける

唐津市 松垣 岩光

見合写真の手垢ことわることにする
特急の遅れただけを支線で待たされる

唐津市 三浦 ひろ坊

昔なら職場の恋は命がけ
明月を見る窓もなし二DK

奈良県 松田 宇宙太

哀しみの歴史を越えてきた埴輪
直線に雨が逃げてくトタン屋根

諫早市 江副 二牛

泣き声が欠伸にかわる子の寝息
発表会師匠の芸で締めくくり

今日もまた一日一善説いただけ
二人して山谷こえた歴史抱く

鳥根県 岩田 三和

ポリーナスに遠く盆栽だけに生き
ふと歳を背中で知った子の重み

熊本市 北川 一進

赤潮のテトラポッドは墓のよう
良識の父も男を否定せず

滋賀県 柚木 踏草

無理すなど言うが解決策はない
幕開きの役者天気をはめて去り

今治市 矢野 佳雲

老眼鏡プラス虫めがね字画緑り
義足への試歩愛の眼に見守られ

岡山市 井上 柳五郎

あれも効きこれも効きます置き薬
反抗期すぐに背中を見せたがり

長崎県 岩崎 和子

勝つ組は綱引く腰がよく動く
仲のよいコンビ結局ビリになり

寝屋川市 小林 鯛牙子

食欲の秋を気にする娘の夜食
倅せな積木父の土台がゆるがない

今治市 渡辺 南奉

鳥根県 松本文子

赤トンボ冬を迎える円舞曲
隙のない女笑顔で武装する

石槌の麓の里は柿すだれ
車間距離おいて女を見るも齡

句読点しかと目標立て直し
作戦の一つ盛り場逆に衝く

披露宴一節聞かそと立ち上り

この暑さ玉三郎も暑いかな

同窓会出世せぬのがよくしゃべり

晴れの日のネクタイ明るい柄になり

説教をしたがるネタは大法輪

とき放ち寝ころぶ野辺に秋の色

民宿のような騒ぎで子等帰る

乗合す無言の長さエレベーター

今治市 園部 正則

松江市 黒目 大鳥

大阪市 中辻 千子

大阪市 岡田 ふみ

山口県 高崎 雀声

高槻市 大垣 たもつ

大阪市 新川 貞祐

唐津市 岩崎 実

東広島市 石井 さわ子

東大阪市 加藤 千代子

岡山市 清水 金太郎

腹心と思い込ませた仕掛人

無理解を勝手にせいと突き放し

豊年を古米としては喜こべず

左の頬出さぬ前からなられる

ヘツロウてばかりはおれぬ俺の性質

言い負けた心の傷の尾の長さ

今朝も亦無事でお早う云う二人

みのる秋でも私は減量中

生き字引ついに遺影の中へ消え

雑談の手が伸び庭草引き千切る

節高の指に生涯支えられ

半分は他人に自慢の菊の鉢

ヘルメットかぶると心が暗くなる

東予市 小山 悠泉

唐津市 筒井 朴竜

唐津市 山下 勝一

唐津市 田中 紫浪

唐津市 桑原 掬治

唐津市 田口 虹汀

羽島市 伊藤 静江

町田市 竹内 紫鏑

兵庫県 高橋 近江

岡山県 池田 半仙

羽咋市 三宅 ひろ子

鳥取県 大坪 天涯

この頃の日記反省ばかりして

現在に満足をして天高し

私生児を産んでも猫の惡びれず

勉強の嫌いなとこまで親ゆずり

御世辞など言つて他人は仲が良し

バスガイド客を飽かさぬ名調子

君が代も相撲の時だけなり文句ない

畦道に思案の顔へすすきの穂

グリーン車に身分違いが落ちつけず

瞽女の瞳にけものごっここの燈がゆれる

お守も一緒に入れるパスポート

★

寶石になって自分を売り込もう

八戸市 紅 葉 山

豊中市 田 中 善四郎

大阪市 平 井 露 芳

八戸市 島 田 昭 治

尾鷲市 渡 辺 伊津志

大阪市 野 田 君 枝

寝屋川市 福 富 隆 子

泉佐野市 大 工 静 子

出雲市 板 垣 夢 酔

広島市 す が かつこ

八戸市 小 泉 紫 峰

名古屋市 鈴 木 可 香

仏法僧の正体見たりコノハズク

新茶の香妻の湯呑へつぎ分ける

今晩は祖母と寝る児の高い熱

祖父元氣赤いシャツ着てゴルフする

大洲市 米 澤 曉 明

小山にくらべてもビルは小さいもの
先生は大正頃の元巡査

禿げかけて何をかぶろう無帽主義

病室の窓桜からいま紅葉

病院の裏門安置所ここにあり

岐阜市 市 川 鱗 魚

共稼ぎ続く積木はまだみじめ

にしん場の霧笛四島まだ未還

紙屑になった願いの千羽鶴

当てにする金も小さな株をもつ

耐える松雪はかざっているつもり

東京都 池 口 吞 歩

後、何年、生きられるかとプラン練る

プラン練りながら余生が忙しい

石橋を叩いてプランまた変り

折角のプランに風雨注意報

結局はプラン、プランのままで老い

バンコクで拾う

黒川 紫 香

外車、外車

一步バンコクの市内に入ると車の多いのに驚く、それも外車といわれる日本製のものが目立つが古いものばかりでタクシはメーターがあつても全部毀れているといふ。バスにはドアがなくラッシュ時には鈴鳴りにぶら下つてゐる。この外にシムロという輪タクがあり、それらが事故も少なく右往左往と動いてゐる所にバンコクの一面を見るこころがした。

水と流れと生活と

バンコクで切りはなせないものに川があるメナムと呼ばれる大河は激んでいてどす黒いがバンコクの人人には欠かせない生命の川であり聖なる川である。大船小舟がひしめきどれるが生活の支えであり、その支流は南国特有の椰子ココナツ、その他の樹木が繁りその下で今にも毀れそうな板小屋が住居となつて庶民の生活を助けてゐる。濁つた川で洗濯をし食器を洗い用も足すという。それでいて伝染病の起らないのは奥地から流れて来る土質と常に水底が動いてゐるからだといふ。ここで本當のタイの生活を見ることができた。日本の朝市とも思える水上マーケットは果物、等日用品小舟に積み、狭い水路を巧みに操つて商いをしてゐる。新鮮な果実の匂ひが

鼻をかすめる。これも一つの生活の姿でもある。

ワット、ワットのバンコク

バンコクで見逃せないワット(寺)は極彩色の陶片をはめこみ旭日に輝く姿が美しい暁の寺(ワットアルン)本尊がエメラルド寺院(ワットプラケオ)三米の仏さまが全部金で出来てゐる黄金仏寺(ワットトリミット)等々どれを採り上げてても、華麗な美しさは眼を見張るものがある。見落したねん寺、大理石寺院にもそれがいえると思われる。

王様の国タイ

タイは王様の居られる国である。我々が見ることができない現在の宮殿は別として京都御所とも思えるチャクリリ王宮は王室の儀式が行われる所でその華麗さと壮厳さは口にいえない。ダイヤをあしらつた王座、調度と壁の彫刻は見事という感じが深い。流石に王様が居られるという感が深い。

黄衣の僧

仏教の国タイの男子は一生に一度は僧籍に身を預けなければならないそうで、托鉢に出る僧にその心が伺われる。女性は話しかけてもいけないし、一般の人でも左手でふれることはできない厳しい戒律は街を歩く黄衣の僧にも見られる。

バンコクの子供達

観光バスが止ると手に手に木彫りの象や民芸品を高く掲げて奇声を発しながら寄つてくるのは殆んど子供達である。この子供達は日本を千円単位で取引しない五百円という貨物は余り知らない米ドルを喜ばない所に経済大国日本をこそよく意識する。何処の国でも子供は可愛いのがタイの子供達はそれにも増して可愛い。舟や車で過ぎ

る我々に必ず手を振りあいそを示す。まだ、いたいけない子が母親に抱かれながら手を振る様子は本當にほほえましい。

怖れさと楽しさ

バンコクはスリと盗人が多いそうである。懐ろの注意をガイドが重ね重ね叫ぶのである。もし心のどこまでも感じる。市内は早朝一時から四時半迄外出禁止になっているのでうっかりはめをはずすと帰れなくなる。夜の街は案内人が居ないと歩けそうもないので止めにした。

タイ料理は香辛料がきついがスワナホンという大きなタイレストランで喰べたタイのないう大い料理は日本人の口に合うように出来たのか結構味わた。それと料理には必ず出て来る果物、赤い実のパパイヤ、パイナップル、マンゴー、ドリマン等は、喜ばせてくれる。街ではバナナを焼いて売つていた。楽しく見せるものにタイ娘の民俗と古典の舞踊、なかなか美しくて楽しいが、これらの踊りを七、八才頃から習うということ、で、手先と足の爪先の微妙な動きが美しい。タイといへば象とシヤム猫だが、象は奥地に居てなかなかの動きものだが、市内では観光だけにしか姿を見せないし象タクシといふものもある。シヤム猫は殆んど姿を見せない。

ドアのないバス鈴鳴りのまま走る。ヒリヒリとしてても日本の舌に合ひメナムの濁り聖なる誇り崩さない。王様の写真飾り水に生く。果物の香りがいづばいに播ける。香の匂い一段ごとに抜ける塔。素足を止めてエメラルドの輝き見る。王様が居られるタイの美を見せてひれ伏して見ても黄金の仏さま

52年度二賞候補作品



同人の部

竹原市 森 井 菁 居
生き方の違いを敵のように言う(2)

和歌山市 垂 井 千寿子
女三人ふつと話題の無いこわさ(2)

大阪市 河 野 君子
小さくちいさく夫婦円を描き直す

兵庫県 遠 山 可住
沛然と雨人間を一人にす

神戸市 小 浜 牧 人
子に渡す地図に矢印などはない

選考委員

中 島 生々庵
西 尾 栞
若 本 多久志
川 村 好 郎
菊 沢 小松園

正 本 水 客
戸 田 古 方
大 坂 形 水
橘 高 薫 風
小 浜 牧 人

倉敷市 水 粉 千 翁
春めぐる母なる匂い蓬摘む

倉敷市 小 野 克 枝
勝馬の淋しい顔を見てしま

富田林市 岩 田 美 代
燃えて落つ夕陽に未練の朱が残る

富田林市 和 田 維 久 子
一期一会みな邯鄲の夢なりし

神戸市 小 浜 牧 人
移り香に男の罪が匂うなり

今治市 月 原 宵 明
叱らない父へ黙って酒を酌ぐ

竹原市 鈴 木 かつ 子

木の葉さえ人の心にふれて散る

米子市 八木千代

思い出のぬくみ小出しに抱いて寝る

島根県 藤井明朗

あきらめてから一点がよく見える

神戸市 中村ゆきを

金に縁なかった父の骨白し

岡山市 川端柳子

鎖からはずせば一個の小さな輪

神戸市 小浜牧人

一つだけ鳴る鈴がある母子家庭

倉敷市 水粉千翁

分け合えるとき貧しさがあたたかい

岡山県 嘉数千代香

庶民絶叫符は風にさえぎられ

桜井市 岩本雀踊子

フト見れば私の表札いがんでた

八尾市 高橋夕花

にぎり水生きねばならぬ糧と知り

富田林市 和田維久子

無から有 明日のロマンの頁くる

米子市 八木千代

新調の靴定年を蹴り返す

守口市 野呂右近

ぬくい日も冷たい日もあり二人の手

竹原市 小島蘭幸

川枯れて貧しきものを見てしまう

泉大津市 村上春巳

鐘の音の消えるところは暮れている

富田林市 和田維久子

黙ってる母が一番たのしそう

八尾市 高橋夕花

片っぱの目を閉じておく善もある

東大阪市 本多清人

しんがりに父が帰って今日がすむ

松原市 谷垣史好

屑籠の位置まで腹が立ってくる

兵庫県 河原みのる

重宝なことは無かったことにする

東大阪市 竹中肖二

真実を告げる言葉を選っている

竹原市 小島蘭幸

恋終るつくつくばうし鳴いていた

鳥取県 鈴木村諷子

右の町左の村の一河の情

青森市 工藤甲吉

きりぎりす胡瓜の色で死んでいた

兵庫県 遠山可住

札束を固い握手と錯覚し

八尾市 高橋夕花

ひと一人庇えばぬれる女傘

大阪市 西出一栄

花吹雪こんな往生出来るなら

大阪市 山川阿茶

人生をお悟りやすと大文字

(以上の句は路郎賞候補作品の最終選に残ったものです。同一句は割愛しましたが、以下の点数には入れました。三回の中間発表から二句までは一句、四句までは二句、六句までは三句と
いうように編集部選で発表。なお句の下の数字は推選数です)

神戸市 小浜牧人

誤診とは言わず薬が替えてあり

制服を着ると掟が纏いつく

履歴書の一行ひたすらに歩く

鏡に向う女 うしろは隙だらけ

大阪市 小出智子

本棚の本死ぬ日のことは考えぬ

眼鏡換えて確かめてみる子との距離

楽器屋も花屋も応援してくれる

倉敷市 水粉千翁

片隅の広さをさだめとは云わず

夫婦愛錆びた鎖に尽きている

安らぎの寝息を聞いて母である

大阪市 不二田 一三夫

宝くじ買うため死んだとも云えず

百円ライター社長が持てばキザに見え

保釈金を届け女は姿消す

桜井市 岩本 雀踊子

花嫁を見る巫女の目は女

射程距離にライバルがいるゆとり

軽い咳 受話器へ残した母のとし

倉敷市 小野 克枝

打ち明けてから太陽が丸くなる

暗闇で何を探している女

雨漏りの記憶の中に住む二人

竹原市 小島 蘭幸

飛んでいる時迷いなどない鳥

君を得ていのちの重さ知るのなり

花嫁の父を眼で追うのよせよ

富田林市 和田 維久子

すばらしい夢は瞳の裏に住む

崩れても咲いてもバラは気尽なり

貝塚市 野坂 つき子

フレッシュなトマトに似てる夏の窓

なにもかも捨ててしまえば笑えそう

豊中市 戸田 古方

立ち枯の白さやたらに描きとうて

すねたのは一羽もいない千羽鶴

高槻市 若柳 潮花

大安吉日親に悲しい日を祝い

イヤホンで聞く長唄へ手が動き

松原市 谷垣 史好

曳き船がゆっくり帰る午後の愛

春四月チビた鉛筆捨てましょう

大阪市 有信 新之助

深刻なふたりへ熱いうどん置く

桐箱入りを幾つか潰し明治逝く

東京都 山根 白星

昼の風呂アルキメデスの原理など

下宿代ためて世に問うものを書き

八尾市 宮西 弥生

色のない風で女をだませない

出嫌いの母へ流行着せたげる

富田林市 岩田 美代

見透しの早い女で彩がない

札束を持つと小さくなる男

藤井寺市 西 いわを

切られても蚯蚓は土を離れない

匂わない菊よお前は保守党か

八尾市 大路 美幸

時々帽子脱ぎたくなる人形

磨かれた靴に祈りがこめてある

竹原市 森井 菁居

四面楚歌救いは飲める口を持つ

正論を吐くとき男鬼でよい

大阪市 西出 一栄

菊の私語そうかそうかと水をやり

はか無きは自分の杖にけつまずき

大阪市 金井 文秋

最高と最低は来ぬクラス会

六十の嫉妬は笑いながら聞く

島根県 堀江 芳子

五カ月の孫の宛名で荷を送り

もつと倅せにしてあげたいな寝顔

竹原市 山内 静水

水嚙んで飲んだ鶏に胃が痛む

兵庫県 遠山 可住

耳垢をとって悟りの顔でいる

島根県 小砂 白汀

満天にギリシャ神話がはめてある

京都市 都倉 求芽

街灯の処だけ雨の独り言

神戸市 中村 ゆきを

父の死後父の無口が判りかけ

大阪市 河野 君子

指櫛に愛の憂いが這い上る

八尾市 高橋 夕花

賀状もどる とても哀しい顔をして

富田林市 板尾 岳人

父ひとり鬼も一匹 山の道 (2)

青森市 工藤 甲吉

幹の太さよ 人間のはかなさよ

和歌山市 垂井 千寿子

五体満足 そんな自由を忘れてる

札束の夢 善人に抱かれない

岡山県 嘉数 千代香

意外ではないユーモア作家の胃潰瘍

大阪市 大坂 形水

一番に日の丸を出す無職なり

大阪市 西森 花村

男湯の少女まだまだ父のもの

堺市 高橋 千廿子

柔かな雲にキリンの首とどく

八尾市 香川 酔々

大空に向って不遜なる欠伸

竹原市 時広 一路

年の功にされて寂しい酔い加減

松江市 小林 孤呂二

きつ先をこわごわ庇う鞆の奥

愛媛県 長野 文庫

ここに居てひっそり回わす風車

岡山市 川端 柳子

嫁はんになればなんとかなるだろう (2)

大阪市 神谷 凡九郎

思い出のぬくみ小出しに抱いて寝る

米子市 八木 千代

竹原市 三宅 不朽
居直った私を私ももて余し

香川県 三井 醉夢
逆行の遍路は亡父のシルエツト

島根県 藤井 明朗
父の口癖鸚鵡にしてやられ

東大阪市 竹中 肖二
彦根城迷って梅の園に逢う

愛媛県 月原 宵明
臍くって小さい汚職した気持

寝屋川市 宮尾 あいき
男とは可愛ゆきものよ酒に酔い

一般の部

和歌山市 西山 幸
咲いて散る ただそれだけの世に疲れ

八尾市 納史 葉
ぼろぼろの心を洗う旅に出る (2)

名古屋市長 大林 曲ん手
善人のその日その日を音たてず (2)

寝屋川市 江口 度

笑い声小さな家からころげ出る

寝屋川市 福富 隆子
左手をかばう手袋穴だらけ

唐津市 三浦 ひろ坊
貧乏と自分で云えるうちは無事

豊中市 高橋 古啓
生涯は只一粒の花の種

豊中市 安藤 寿美子
そのうちに着くさと川はあわてない

島根県 谷岡 芳枝
子と同じ目の位置ならば賭けようか

島根県 飯塚 虎秋
落書を感じしてる寺男

唐津市 田口 虹汀
華も葉も根も役立てて蓮は生き

唐津市 岩下 照冲
陽へ土へ詫びて大樹は枯れて行く

海南市 牛尾 緑楼
車椅子の子に青空が広がった

大和郡山市 今谷 紫園
紫の炎と見たり舞扇

今治市 渡辺 南奉

一步前進ペースは遅々としていても

寝屋川市 柴田 恵美子

快心の仕事を終えた手を洗う

大阪市 文川 野生

風に聞く噂は風の中に捨て

今治市 園部 正則

未練かな元の形のままの灰

西宮市 杉浦 婦美子

人妻として逢う帯をきつく締め

倉敷市 松井 俊風

禁酒して腹の底まで冬になる

松原市 北野 久子

聴えないから一心に毛糸編む

大和高田市 岸本 豊平次

直っ白に書いては雪の面にならず

岡山市 時末 一灯

通り雨誰にも云わないことにする

山口県 高崎 雀声

日雇バス一人一人をつまみ入れ

豊中市 安藤 寿美子

地獄絵をかいて自分でうなされる
和歌山市 西山 幸

傍観者になりきっている置時計

大阪市 那須 鎮彦

静けさは父と母とがもめている

豊中市 高橋 古啓

ぐるぐると廻る矢印だっている

橿原市 西本 保夫

平社員の机はどこにでも置ける

大阪市 文川 野生

大臣の相を持っている乞食

もう泣かぬ女 真珠を貯めている

野良犬よ俺の分まで吠えてくれ

寝屋川市 江口 度

日本の四季へとけこむ黒瓦 (2)

鋭角に曲る若さというものか
富田林市 中村 優

絶景にお坐りやすと木の根っ子

融通無礙もう限界へ来た輪ゴム
新宮市 西尾 功

たぎるもの消す石段をかけ上り

いさかいのあとにピーポー車が走る

八尾市 納史 葉

溜息を捨てて見給え花の道

これ以上裏切りはせぬデスマスク

豊中市 安藤 寿美子

洗っても汚しても私の顔であり

狛犬の血は木枯しに沸くらしく

和歌山市 桑原 道夫

少年よ泣くなら石を捨ててから

あけがたの街灯の火は昨日の火

今治市 園部 正則

薬害の怖さ爪にも模様入り

老人の独り住いの小さいゴミ

豊中市 高橋 古啓

不況風ロダンの首も垂れたまま

大阪市 那須 鎮彦

台風に勝ったかがしは斜に向く

羽曳野市 麻野 幽玄

良き声にあらねどうれし祝い唄

八尾市 田中 紀美代

爆発を待っているのは女かも

和歌山市 樫村 ふみよ

庭はうきだけが知っている孤独

西宮市 杉浦 婦美子

裏切りよりも浅い瀬は渡れまい

唐津市 岩下 照沖

ふくらめる餅を見詰める子なし妻

寝屋川市 柴田 恵美子

スランプへ秋の本屋をはしごする

今治市 渡辺 南奉

玄関が音なく父が疲れてる

滋賀県 柚木 踏草

がたんごとん念押してゆく赤字線

松江市 梅本 登美也

雑兵をポケットベルが追い立てる

柏原市 小谷 葉子

人ひとり許し歳月重んじる

和歌山市 西山 幸

揺れている心みつめる終電車

名古屋市 大林 曲ん手

信じたい風を待ってる曲り角

唐津市 田口 虹汀

疲れたら来いと大樹が呼んでいる

岸和田市 池田 露子

虫の背にのって花びら歩き出す

(河野君子・整理)

愛染帖

橘高薫風選

この人の個性は歪むホツチキス

伊丹市

樫谷 漫柳

激論の煙草の灰も息づくか

悪魔の踊り管楽器は善人が

大阪市

河野 君子

紅葉手折る人よとおくにハイジャック

くちびるの厚い女の薄なさけ

和歌山市

津田 与史

人間の弱さを計る時計買ふ

歳時記に松茸という季語ありき

谷垣 史好

五十過ぎて未だ中也の詩を愛す

指の間を砂がこぼれてゆくいのち

松原市

来住タカ子

家守る八方破れの女の掌

キリキリと悔いがくい込むのも絆

島取県

鈴木村諷子

団体の中に夫婦でないふたり

言いすぎた後で取なすように言い

大阪市

小出 智子

おばあちゃんになるのを他人が知っていたがる

行く当てのないのがひとり菊花展

岸和田市

池田香珠夫

義足だけあとずさりせぬ大焚火

かとなばが足をもがれて叫びおり

岸和田市

池田 露子

子ら去んで月見草たち花支度

天守閣見せて花火は闇に消え

島根県

堀江 正朗

妻の見た秋それだけが僕の秋

悴せを抱いているごと孫抱けば

青森市

工藤 甲吉

公判へ被告外車で乗りつける

恋という愛という字に齡はなし

神戸市

宇佐美和子

一年という静かさよ風九月

九月の陽素直に愛されに行こう

和歌山市

西山 幸

夜の長さへあなたの色を編んでいる

背を向けて秋の詩人と語り合う

愛屋川市

江口 度

負け犬の遠ばえという旅心

一人旅背中の方で陽が沈む

東広島市

高橋 鬼焼

時刻表男と女もめている

旅たのし秋の帽子を買いに行く

倉敷市

藤原 健二

風の道僕には剣も楯もなし

合掌の解剖台は大理石

豊中市

戸田 古方

軽々と白い灯台湾口に

こわがりもせずに鳶と絶壁と

松江市

黒目 大鳥

人生のにごり絵に似る都落ち

友情のはばたき正に好敵手

東京都

山根 白星

松茸のならば桐箱入りで売れ

潮みちてくる上脛が重い

神戸市

小浜 牧人

歓声を遠く奈落の底で聞く

虫の声宇宙の鼓動正確に

いいかげんな答だ教科書のように

ふと出会った一コマ雨の日に似合う

兵庫県

遠山 可住

ハイジャック憎む日鯉を見て飽きず

錦鯉飼うてネクタイまで変る

岡山県

白岩 文衛

日日は好日食卓の茄子の色

ふれあいを大事にしたい秋の彩

秋なれや心はもつと開くべき

富田林市

岩田 美代

ふらちな事考えている園がこぼれ

六法に父の因果は書いてなし

働いて返すといやな頼みよう

新宮市

大矢 十郎

実印へ妻も覚悟の正座する

木犀の香り冷たし理性かも

コスモスが媚態を作る風少し

今治市

月原 宵明

未来かも知れぬピカソの絵を見詰め

宇部市

樋村 天流

国会の女となつて貞ならず

ゼロ解答第一幕の幕が下り

羽曳野市

麻野 幽玄

裏に服す乾いた胸へ彼岸垂れ

これも一つの出合か席を譲られる

寝屋川市

小林鯛牙子

曼珠沙華頼れんとして透いてくる

活けられたように路傍の芒立つ

富田林市

中村 優

いつまでも平和の鳩にさせぬ糞

白い歯を見せぬ女の氏素姓

東大阪市

竹中 綾女

糞虫よ枝の先だよ気をおつけ

蟻たちはもう冬籠る萩も散る

東大阪市

加藤千代子

後味の悪さを忘れ又言うた

眼を病んで貧乏性が苛ち出し

八尾市

宮西 弥生

秋の罪日記に書くは詫びるなり

唐津市

桧垣 岩光

お茶漬が好きジパンの似合う女

悔い多き男の長い生命線

八尾市

大路 美幸

木屋の中の約束信じない

八尾市

高橋 夕花

遙々とはるばると来た星の位置

大阪市

本間満津子

平田市

久家代仕男

手料理の自信酒豪に嫁してから

唐津市

筒井 朴竜

栗田の水も漏さぬ村議選

和歌山市

若宮 武雄

コスモスに埋れて歳など忘れよう

鳥取県

清水 一保

懸命に酒と話して耐える宵

八戸市

小泉 紫峰

美しい青春の血が輸血され

大田市

渡辺九二老

煩悩が聖書に手垢つけただけ

高槻市

若柳 潮花

過ぎ去った日を追うように歳をとり

藤井寺市

西 いわを

白桃の溢れる果汁は骨の髄

神戸市

和田 恭子

ノンセクトはたち凛凛しい眉を持ち

和泉市

西岡 洛酔

平凡に生きたい肩を叩かれる

寝屋川市

宮尾あいき

活けられて草の穂机上へ種をまく

松江市

梅本登美也

人形師今日も心が晴れやらす

枚方市

宮川 珠笑

屋上で昇天しそうに独り佇つ

岡山県

直原七面山

モナリザに似た娘のレントゲンに陰

貝塚市

行天 千代

くる年を暫く止める術もなし

大阪市

神夏磯道子

ほとばりを賣めてる珠数がちぎれそう

倉敷市

水粉 千翁

覗かれて覗く垣根の高さかな

京都市

松川 杜的

駅長の挙手へコスモス揺れている

堺市

高橋千万子

すり逃げた女が蝶に化けて来た

鳥取市

河村 日満

恍惚はやがての姿胸におく

島根県

飯塚 虎秋

ごきぶりに翻弄されている無職

海南市

牛尾 緑楼

占いに明日を任せる女です

大阪市

北 勝美

ピーポーの音は静けさ倍にする

唐津市

岩崎 実

あいさつを月とかわして虫の声

和歌山市

松原 寿子

掌を振らず別れ一途な想い抱く

大阪市

有信新之助

鉢植が退化の証として並び

橋本市

森脇 善彦

秋の野に莫盛敷き恋をものがたり

島根県

小砂 白汀

快いカスターネットで娘が帰り

大和郡山市

今谷 紫園

白扇をかざしたときに出合った眼

大阪市

江城 修史

遊ぶ灯に溶ける男のけものめき

尼崎市

黒川 紫香

男が飲まぬテーブルにある花瓶

藤田頂留子

流行に従い候おんな

新岡回天子

栄転と来れば課長と部下一人

児島与呂志

蟻が恐い娘男を寄せ付けず

三浦ひろ坊

靴だけは拭いて冷戦続行中

矢野 佳雲

コップにも三角四角あつてよし

山下 勝一

紅葉を焚いて風流叱られる

都倉 求芽

雨男入院したら晴ればかり

板垣 夢酔

水死体主へそむいて時計生き

小山 悠泉

愛情の鞭一人子をつき放し

羽原 静歩

小さな器に小さな秋の味

池田 半仙

辻褄を合せて過去が飾られる

三宅 ろ亭

囲炉裏つぶした男いろり火を窓い

西出 一栄

寝つかれずふたたび本と遊ぶとす

井上柳五郎

雑兵の浅学非才らしく生き

出原 敬一

癒えちかき療舎ひねもす秋を読む

神谷凡九郎

無抵抗主義者だったナガンジは

斎藤 通風

とぼけごと知って明るい道も出来

竹中 肖二

しょんぼりと角を斬られた鹿であり

欄 蘭

勤続表賞状に余生花びしく見つめられ

桑原 掬治

青い月しんしん芽えて千鳥足

田口 虹汀

絵でなりと浪花の空をブルーにし

堀江 芳子

ああうまい空気すすきの穂の艶よ

藤村 べ女

追憶の夢はるかなり古都の秋

小幡 里風

善人が見かねてそつと吹く呼び子

伏見 茂美

お小遣くれる末っ娘気楽すぎ

大林曲ん手

救われた聖書は救うことばかり

吉田 笑女

秋日毎帰る家路が遠くなり

山本規不風

経験の自慢を馬券笑うてる

佐伯 越子

恋愛の過去がおかしい年になり

島田 英二

下戸までが飲まずにおられぬすめ様

石倉美佐子

温い布団夫のを先に買う

田井 教之

気まま八百嘘八百それで国会議員とか

島田 昭治

運動会見ればまだまだ血が騒ぎ

島崎富志子

幸せな日々を不満に思う欲

石垣 花子

寝た切りの米寿へ市からの祝品

園部 正則

逆わぬ人で深さを測りかね

柚木 踏草

餌袋にマザーコンプレックス気味の酒

草深 醉升

馬鹿だった自分を嗤い独り酌む

藤田軒太楼

老兵は消えずナツメロくちずさむ

「評」巻頭の句、蟋蟀が間断なく鳴くのを

聞いていると、いつかな大宇宙の空間から、

ピーッピーッと送られて来る信号音の不思議

とまぎれてしまう。或いは蟋蟀は、真実遠い

星と交信しているのかも知れない。正確にの

下五のゆるぎなきがこの句を活かした。文衛

さんの第二句、錦鯉の色とネクタイの柄、ネ

クタイが泳いで行くと愉快な想像をするのも

鑑賞者の自由である。美代さんの句、三句な

私の提案

どんなものでしょうか

文化祭川柳大会

西田柳宏子

本年も亦文化祭に寄せて、各市民川柳大会が華々しく競催？されている。どの句会に行っても大体同じ顔触れが顔を出している。しかも年々同じようなことの繰返しである。そして限られた十月から十一月の休日を利用するため必ず鉢合わせで、只でさえ少ない傾向の参加者を分割する形になってお互いに苦慮している。

そこで私は提案したい。数年前からブツブツ話していたことだが……

他府県はともかく、少くとも大阪府下の各都市は府と共催で、たとえば十一月三日に中央公会堂で今年は大阪市の主催、来年は八尾市の主催という風に廻り持て実施、参加都市数の兼席題を出し、夫々の市長賞、或は教育委員長賞を出す。特別課題に府知事賞を出すという風にすれば、少なくとも現在の各市民川柳大会に倍する参加者もあり、主催都市の面子も立ち、参加柳人も気をつけて、あちこちらと飛び廻ることもなく、参加者も増

加を四方八方好都合と思われませんが……どんなものでしょうか……。

編集室訪問記

植村客遊子

「職場川柳とは文学論に引きずり回される事なく、あくまで労働者の認識が原点で自分の作品には自信と主張がなくてはならない」等ともっともらしい屁理窟を云って回ったものだ。

前衛川柳などとゴタゴタした型式の句を作ってもって柳壇に新風をと大見得を切ったり又同人間で云いたい事を云っては争いを起し分裂寸前の柳社もあるが、川柳はやはり、三要素をふんまえ、五七五とリズムミカルな本格川柳を望むものである。当時川柳は人間であるが、まさまざと教えられ成程なあと思った。

薫風さん、一三夫さん、葉子さん等と雑談中から「小谷さんお電話ですヨ」赤電話なら二円か五円分もせぬ間に帰って来られた。話は御家族が昨夜から四〇度近い熱でまだそれが下らないので早く帰って来いと由。

「昨夜からの重病人をほっといて来てくる人があるかいな、早よ帰ったげんとアカンが

な」怒ったような口調だが、眼鏡の奥にはいたわりのやさしい眼差し、やはり貴公子だ橘高薫風さん……それでも一や片付けとかんと「Tシャツにジーンズのストラックスといったモードに強い近代女性、責任感強く気どらず気さくで親切でやさしい方なので和服を召されてもよくお似合で心あたかく奥ゆかしく、しとかかなインテリ葉子さん。

「ソナンはっ」といって早よ帰ったげや」エネルギッシュで一見社長タイプの紳士、秋田実先生と云えば裏方的な存在なれどこの人ありと知れたユイモリスト不二田一三夫さんーお互い助け合い、いたわり合う麗わしい川柳塔編集トリオのスタッフ。先代路郎先生の御心を心とした現主幹を軸に浪速情緒豊かな環境により一頁一頁に微かなロマン溢れるユイモア。チョッピリパーソスと言った編集テクニクにより育み培われて来たか川柳……ヤッパリ川柳は人間であると云う所以をしみじみ身にした川柳塔社真夏の午後のひとときであった。

秋田 實先生追悼号・不二田一三夫編集

『漫才』第10号で廃刊します

漫才の育ての父・秋田實先生が9月27日に逝去されました。ここに追悼号を出し、雑誌「漫才」は殉死することになりました。

〒54 大阪市生野区勝山南1-14-17
漫才作家くらぶ

古川柳現代解釈法

香 川 醉 々

今回は、極めて真面目にいきましょう。

「真面目な冗談」というコラム欄も新聞にある時代ですから。次の人口に膾炙する名句、知ってる人は知っている、知らない人は知らないという古川柳中の名句、

やわやわとおもひのかかる芥川

いかがです。名句でしょう。むかしおとこありけりではじまる伊勢物語の主人公業平君が、二条の後の若かりしころ、盗み出して駆落、芥川を渡る名場面ですね。うら若き女性の重みが、おぶっていると、じわじわかかってくる、世にもロマンチックな場面です。こんなところは、教科書には出て来ません。

でるのは、おかたいところだけですから、学生諸君はつまらんとばかり選んで教えられるから、国語は嫌いということになるのです。文部省の役人どもの頭の程度がわかります。さて、本題に戻って、現代解釈法で

は、どう解釈をすればよろしいかということになります。ロマンチックだとはとんでもない。世の文学青年、こぞって芥川賞に挑戦、エーゲ海に捧げて、やっと手に入れるという

代物ですぞ。手に入れた途端、はいそれまででポシャンでは困ります。益々筆を磨いて作品を発表せねばなりません。芥川賞の重みが、やわやわと重圧になってくるのです。体力も充実させて、オリンピックにも出場できるようにしておかないと、注文原稿をさばき切れません。路郎賞でも川柳塔賞でも同じです。賞の重みがじわじわせまる。まことに現代感覚に溢れる名句です。

心中をせぬ業平の行所

これも一生の間、女性にもててもて、モテモテおじさんだった業平君ですが、その果に心中をしたとも聞かない。どうなったのだろう。現代あれ程もてれば、たいがい田中君

でなければ、金づまりの心中事件となるのですかねえ。案外バリ島へでも雲隠れしたのでしょうか。ところが現代解釈法では、もったうがった見方をせねばなりません。この業平は、ハイジャックの犯人をたとえたものです。乗客と心中々々といながら、心中した例はありません。福田君は、心中されてはたまりませんから、法定外の身代金で、勘弁して貰いましたが、西独では、心中なら、勝手に一人でしなさいとばかり、片付けましたね。

日本赤軍の業平君は、十六億円持って、何処へ行ったのでしょうか。カスバの女王重信姫の所でしょうかね。

機嫌よう河内通の頭巾縫

これもまたまた業平君のこと。伊勢物語第二十三段に故事来歴があります。序文を書くといのですが、すこし長くなりますから、文庫本などでごらん願います。江戸川柳人にとって業平君は仲々いいネタでした、柳多留拾遺四には、「河内まですきには夜半に身をやつし」その他「知らぬかと思や知つての立田山」などあります。

筒井筒の女（筆者は幼なじみという解釈より、筒井に夫婦として暮らしていた女としたほうがよいように思っています）は、業平が河内の高安の女のもとへ、夜な夜な通うのがめず「風ふけば沖つ白波たつた山夜半には

君がひとり越ゆらん」と、その道中を心配した。おそらく夫のために身をやつ頭巾など縫って、からだをこわさぬように心がけたのであらうと、川柳子は句にしたのです。どうです。現代ウーマンリブの世に考えられないことでしょう。

さて、筆者の解釈のように、筒井を地名と考えると、近鉄京都線（西大寺、郡山、筒井、八木、橿原神宮前）にあります。筒井から、河内高安までとなると、法隆寺を経て、からくれないに水くくる竜田川を越え、信貴山下から、今ならケーブルで山上へ、それから、信貴生駒スカイラインとなっている屋根伝いに高安山まで来て、ここからこれも現在ならケーブルですぐ信貴山口に降りて、山本から高安へ行けますが、業平の時代は、たいへんでした。いっぺん歩いてみたいかがです。多分、午前中に筒井を出ても、高安に来るには、確かに夜半になるでしょう。恋のためとはいえ、えらいことですね。もう一つの道は、王寺へ出て、大和川の溪流をはるかな下に見て、河内堅上を経て、柏原に出ます。現在関西線が通っていますが、柏原から王寺まで、トンネルが四つもあります。やはり険阻な山越えをしなければなりません。柏原からは恩智を経て、高安へ出ます。どちらの道でもつらいことです。（注・大阪から奈良へは、生駒山系のほぼ中央を抜ける暗峠（くら

がり峠）を通ります。芭蕉の紀行文があります。仲々いいハイキングコースで、小鳥の鳴き声でいっぱいです。）

すこし原文を訳してみますと、…なにヨイヨイ先生の訳ですて？とんでもない、国文学の泰斗折口信夫先生の訳ですから、御安心ください。

さてそうして、幾年も経過した後、女が、親がなくなり、またよりどころがなくなるにつれて、男は夫婦二人だけで、甲斐性のない生活をしておられるものかと思つて、河内の国、高安の郡に、通うて出かけることができたことだった。そういうわけであったけれど、この以前からの女は、いけないことだと思つている様子をあらわさずに、出して

一分間の柳論

よく川柳とはどんなものですかと問われることがある。こんなとき私は、川柳とは一段形式にまとめあげたペンのスケッチですと答えているのです。

素描ならスケッチには、大作の前に立ったような迫刀こそないが、本当の意味でのいのちの線があり、また描いた人の個性が溢み出ていると思うのです。最近ある雑誌社から出た素描大成を見る機会を得て私はつくづくとその意を強くしたのです。

阿萬萬的

やったことだったので、男は、ほか心があつて、こうしているのであらうかと、思い疑つて、植込みの中に隠れていて河内へ行ってしまったふうで、見るといふと、この女、非常によく、思い入れ深いふうをして、ばんやりと空を見て、「風が吹くというところ、沖のほうの白波が立つ。それではないが、竜田山、それをば、夜、あの人が、一人越えているだらうか。」とよんだのを聞いて、無上にかわいいと思つて、河内の国へも行かなくなつてしまつた。

さすがの業平君も、後悔したというお話、メダタシ、メダタシ、すこし真面目になりますました。平らに御容赦。御容赦。

「スケッチ」その魅力にとりつかれて、私は四十何年かの間作句をつづけて来たのです。スケッチする心には雑念がなく、真似や気負う心はないのです。だから素直な句が生れて来ると思うのですが……。

気負つて作句すれば、強い言葉に引きづられ、その羅列となつてひと頃の全学連の街頭演説調のものとなり、何かしらジャリジャリと砂でも噛むような隙間風を感じるのは私だけでしようか。

思いつくままに

大路 美幸

▼或る句会のあとで、川柳について訊かれたとき、思わず「生きさま……」とつぶやいたことを思い出した。人間にも鳥にも花にも生きさまがある。

▼日曜日の昼前、欽ちゃんの「スター誕生」というつまらない番組がある。十五、六才のミーちゃんハーちゃんが咽喉を競い合うのだが、その審査員のことばには、時々聞かせるものがある。

A「非常によろしい。でもあなたはそのままではプロになれません。どこがいけないのかなあ、姿勢かな、態度かな、いやもっと突っ込んで言えば、あなたの日常を直さなければ駄目です。あなたは明るい気持で友達と話をしていますか。食事の前後に『頂きます』『ご馳走さま』と言っていますか。」

B「資本の要らない商売ほど難かしいものはないんですよ。例えば、紙と鉛筆だけで足る小説でも、包丁一本あればよい板前さんでも、プロになるまでにはいろんな苦労があるんですよ。わかりますか。」

C「素質ですね。きつい言葉のようですがあなたはプロ歌手になれません。同窓会や、文化祭では、きつとあなたの唄は拍手されるでしょう。でもそれ以上は無理です。」

▼愛することは耐えることなのね……。とメロドラマのヒロインが言った。耐えることのない愛はない、と僕も思う。僕は川柳を愛している。だから耐えなければ。

▼川柳作家と川柳家はちがう。川柳作家は、川柳を高めるために必要だし、川柳家は、川柳を維持するために必要だ。どちらも、川柳にとって大切な人達ではあるが、一人で両方になろう。又はなっていると思う者があればそれは大きな間違いだ。六巨頭でさえも、分析すれば、所詮、そのどちらかであった。

▼鶴彬が反戦川柳作家としてクロースアップされている。(あの頃は、川柳の抵抗精神を充分に発揮出来る材料が幾らでもあった。でも抵抗川柳を発表するとは鶴彬のような運命を辿る。だから鶴彬のように、あえて抵抗川柳を発表するものが目立った) というものがある。この人に、若し鶴彬の時代がもう一度来たら、抵抗川柳はつくれまい。

▼どこかの大会で「つけやいば」という題があった。どんな句が秀句に選ばれたか忘れたが、きつと「つけやいば」では駄目だという内容だったと思う。それは、誰もが知っている。だのに、此の頃の社会には、なんと「つけやいば」の多いことか。社長に気に入られる奴も、東大に合格した奴も、そして、僕も

御 礼

先般、小著「柳行季」を差上げましたところ、早速ご丁寧な賞詞や御祝を頂戴いたし感激しておりますが、今般重ねて有志の方々から、出版記念の祝として立派な村上直行作青銅製馬の置物ご惠賜に与り、ご芳情洵に有難くすぐにでもお目にかかり親敷く御礼申し上げますのですが目下病気の静養中ですので不本意ながら誌上を借りてご挨拶申し上げます。どうも有難うございました。

昭和五十二年十一月吉日

宝塚市武庫川町四番三号
宝塚第一コーポラス八一五室

傍島 静馬

川柳塔同人有志

御一同様

君も！

▼太陽も、海も、見る人の心によって様々に変わる。母だって、子だってちがう。一歩だってその目的、考えによってちがう。こんなにちがう考え方で、何十年も生きて来た者たちが、お互いにわからうとする。そこに驢がある。誤解がある。寛容がある。信頼がある。▼サボテンに、特殊の装飾をほどこすと、人

間の言葉に答えるという。鮭は、生れた川に必ず帰って産卵するという。山椒魚は、何億年のむかしのままだという。肉体は滅びるが魂は滅びないという。ほんとだろうか。

▼オカアサンモ、センセイモ、シンゴウガ、アオニナツタラ、ワタリナサイ、トイイマス。イツマデマツテモ、シンゴウハ、アオニナリマセン。ミドリハ、アオトチガイマス。

▼信じることは疑うことである。疑いを繰り返しながら信が生れる。愛する人を、一度も疑ったことのない人は不幸だ。疑われない愛人はそれより不幸だ。

▼ラブを愛と訳し、ユーモアを諷刺と訳し、ボエムを詩と訳すのは間違いかも知れない。英国人と米国人でもラブの内容はちがうかも知れない。まして、日本人の愛と、ラブは随分ちがうに違いない。

▼PTAのお母さん方の会話。

「うちの子は落ち着きがないんですよ。テレビを見ながら、新聞をこまかく破って、散らかすんですよ。」

「私ともそうよ。それに自分の机の整理が少しも出来ないんですよ。そのくせ、私が片付けてやると怒るんですよ。」

「わたしともそうよ。勉強をしながら、ラジオを聞いたり、テレビを見たり、ほんとうにしようがない。」

どうやらこの子も同じらしい。情報氾濫が人間を画一化しているのではなからうか。良い意味での「はみ出し人間」が育って欲しい。

い。

▼哺乳動物を分類すると、離巢性動物と、巢性動物がある。前者の例には馬があり、胎内にいる期間が長く、生れるとすぐ立ち上ることが出来る。後者の例には鼠があり、胎内の期間が短かく、不完全な姿で生れる。人間は胎内にいる期間が長いので離巢性動物に、より近い。だから余り長い年月、親が可愛いがり過ぎると未発達人間になってしまう。人間は親から離れ、組織から離れ、最後には孤独に死んでいくものだ。とは吉岡たすく先生のお話。

▼人間の社会で真実はほんとうに一つだろうか。僕の真実とあなたの真実は同じだろうか。先哲の教えは間違っていないだろうか。昨日の真実は、今日の真実だろうか。

▼今、あなたも僕も生きていることだけは確かなようだ。

▼生きざまを川柳にしようと思う。ほんものの川柳をつくりたいと思う。

読売新聞から
(夕刊・11月2日付)

川柳塔賞は西山 幸の

「咲いて散るただそれだけの世に疲れ」に決定した。川柳と俳句の中間に位置する作品で

人生詩といった感じだ。

宮川珠笑の

「アパートに囲まれ墓石おちつけず」

江口度の

「母の味電子レンジが消していく」

吉野富子の

「排ガスを吸いやすい朝のバスを待つ」

などは現代を描いてまことに風刺的である。

草深醉升は、近頃の川柳のような俳句、俳句のような川柳、あるいは革新川柳などが、

短詩文芸の混乱しそうな中で、各人がそれぞれの意見を主張している、といった意味のことを述べている。

たしかに現在の柳壇は主義主張が入り乱れ新しい曲り角に立っているといえそうだ。

(正)

落合思月著

句集『望郷』

頒価七百元
(送料共)

菊沢小松園氏(本誌雑詠選者)が、「これから川柳を勉強しようとしている人達にも、敢えて推選する」と、柳歴五十余年の「思月句集」は安心して推せんできる好著である。と述べておられる。

本社でお取扱いいたします。

七面鳥

不二田一三夫選

七面鳥ひろげる羽根も聖夜まで
七面鳥紳士と淑女に切りきかれ
鈴の音を悲しく聞いている七面鳥
洗礼を受け七面鳥皿に乗る
みこころのままにといいし七面鳥
キリストは生まれ七面鳥は死に
来年の命を持たぬ七面鳥
天国へ行きたくもない七面鳥
七面鳥無くともクリスマス祝えます
アーメンの一声七面鳥寒し
七面鳥聖夜へ十字架負わされる
七面鳥神のお召しとも云えず
イエス様の踏んだ道知る七面鳥
どん底に七面鳥は笑えない
メリクリスマス恨みの数々七面鳥
クリスチャンうまそうに食う七面鳥
七面鳥も主も商魂に利用され
キリストの愛七面鳥にわからない
煩悶を主にすぎるなり七面鳥
七面鳥には邪教に見える聖教徒

軒太楼 花子 度 齊 柳 芳仙 保夫 綾女 久隆 実 虹汀 狗治 伊津志 夢酔 本蔭棒 勝美 春日 代仕男 恒治

七面鳥十字を切つてきざまれる
キリストを恨むとすれば七面鳥
七面鳥の血をキリストは見まいとす
キリストを信じる七面鳥の目が衰れ
殉教への道だと悟る七面鳥
キリストと相性が悪い七面鳥
キリストの教典疑う七面鳥
降誕の鐘七面鳥は青くなり
七面鳥うっかり出来ぬ月がくる
クリスマス七面鳥は落ち着けず
キリストの愛に七面鳥昇天
人間の都合で七面鳥が肥え
七面鳥主に問いかけることがあり
キリストの御前で食われる七面鳥
キリストを侵略者とみる七面鳥
クリスマスのない国さがせ七面鳥
七面鳥最後の色に迷って
七面鳥の命をシングルベル削る
七面鳥今日は裸で吊るされる
お誕生の祝いに殺るす七面鳥

素身郎 右近 惠美子 隆子 貞祐 千子 朴竜 どんたく 木魚 弘生 方大 茶人 踏草 岩光 勝一 思月 無人 洋々 肖二 ますえ 右頰を打たれるどころか七面鳥 七面鳥不況の風へ年を越し 七面鳥に七面鳥は処刑され 七面鳥ボーカルフエースが欲しくなり おシヤカさんにお助け願う七面鳥

フルコース七面鳥が盛りあがる

登美也 人

地

天

七面鳥のルート西部の大平原 ひろ坊
本当の色で寝ている七面鳥 耕草
(選者のご都合で代選しましたー編集部)

ゆず湯

村上旭童選

ゆず風呂に熱燗老を忘れさせ
心まで暖まりますゆず湯の香
首までのゆず湯に霜の予報きく
しきたりの湯ぶねへゆずは申しわけ
今日の幸ゆずの香りの湯にしたり
祖母がいて冬至変りをなくゆず湯
とっふりとゆず湯につかる柚の里
息災を願うゆず湯に浮いた首
ゆず一つ浮かせて風呂の湯が溢れ
ゆずの湯に浸って唄う冬の詩
マイホーム冬至待ってたゆず湯たて
ぬくもったゆず湯の肌に風やさし
竜子描くゆず湯のけむり黄色くて
経営難すっかり忘れていたゆず湯
移り香をもろにゆず湯のバスタオル

勝一 三和 可住 曉明 実 茶人 肖二 宵明 悠泉 一路 翁堂 綾女 古方 大方 可住

夫婦では勿体ないゆずの風呂
正則

豊作の柚子の香りに酔う湯殿
花子

父ちゃんが何か唸っているゆず湯
本蔭棒

手拭に一口包んで出るゆず湯
漫柳

ゆずの湯に首だけとなり暮ること
どんたく

ゆず湯の香旅の疲れを落ちつかせ
代仕男

ふるさとのゆずの木思ふ冬至くる
木魚

倅はゆず湯忘れぬ妻がいる
度

気持悪い湯だと子供は云うゆず湯
不二

長生きがしたいゆず湯をかき廻し
芳仙

窓越しに御堂の見えた柚子の里
貞祐

でこばこの方がゆず湯によくうつり
伊津志

ああ今日は冬至だったのかゆず湯
方大

初恋の甘さがゆず湯の香りかく
洛醉

ゆず追加して入浴は妻の香
草

ゆず湯上がれば南瓜の膳となる
佳雲

ゆずの香をタオルに包むもらい風呂
俊風

えり足の白さへゆずの湯が香り
重人

折角のゆず湯今夜も残業か
素身郎

ゆず湯から元氣な声になつてくる
一進

倒産のニュースゆず湯の中で聞く
洋々

雪深き里のゆず湯は薪でたく
登美也

二人だけもつたないがゆず湯抜く
無人

天 地 人

ゆず風呂にお使いやすと届けられ
古方

つぎの日もいれてゆず湯の暖かさ

社会鍋

小谷仙山選

この金の行衛を思う社会鍋

社会鍋今日は我が身につまされて

社会鍋小さい善意コトリ落ち

恋人にいいとこ見せる社会鍋

知恵でなく善意にたよる社会鍋

ちっけな善意が積る社会鍋

木枯に震える影の社会鍋

不況風冷たく軽い社会鍋

着飾った人は入れない社会鍋

真心を頂戴します社会鍋

足音が過ぎ去るだけの社会鍋

おばあさんに労わられてる社会鍋

社会鍋ぼつり夕都市枯葉色

社会鍋入れる勇気の足を止め

喜びを他人にも分ける社会鍋

社会鍋今年はいにく失業中

まわり道ここにも有った社会鍋

宝石の指で集める社会鍋

肖二

虹汀

可住

不二

佳雲

優

どんたく

右近

綾女

眺明

俊風

耕草

踏草

洛醉

貞祐

素身郎

方大

道子

足早に行く人多き社会鍋
どんたく

社会鍋も救世軍も冬の色
同

社会鍋まだ人情は地に落ちず
春日

人情を師走で拾う社会鍋
右近

社会鍋うしろは辻の吹き溜り
宵明

声漏れるわりに溜らぬ社会鍋
俊風

ジャンパーのポケット探す社会鍋
本蔭棒

社会鍋避けて弱気な男ゆく
正則

不況風もろに受けてる社会鍋
軒太楼

ポケットの小銭も生きる社会鍋
右近

吹き抜ける師走の辻で社会鍋
代仕男

野良犬は見向きもしない社会鍋
無人

社会鍋ぼつんと暮れる街の角
素身郎

福祉国家の裏を知ってる社会鍋
岩光

佳

白い杖フト立ちどまる社会鍋
登美也

助合い善意が鍋に満ち溢れ
悠泉

十六億円煮込んで見たい社会鍋
緑楼

駅前に今年も据える社会鍋
肖二

善人のふところさびし社会鍋
実

善根の関所となった社会鍋
優

地 天 人

地下足袋が迷わず入れた社会鍋
肖二

善人の顔しか知らぬ社会鍋
一路

神の子に光りあたえる社会鍋

軸

神の子に光りあたえる社会鍋

初歩教室

題「月」

本田恵二朗

人間社会の大きな流れの中での、孤立感とか不安感による、色々な事件が報道されることしきりの世相を嘆く人は多いであろうし、私もその一人である。親と子のコミュニケーション、近隣とのコミュニケーションなどが薄れているからこんな現象が起こるのだと私は思えてならない。

そこで私は、趣味を同じくする者たちが手を繋ぎ合って、人生街道を歩くことによって、孤立感や不安感の七十%位は解消するであらうと思う。われわれ川柳人は幸いにも、それぞれグループを持って楽しく生々としたコミュニケーションを抱きしめ合っていることを誇りとしたい。そして増々こまやかなものに育ててゆきたいものである。そこには孤立感も不安感も無い、明朗な人生街道が延々と続いている。

空の旅夢の月掛もう満期
(空の旅夢の月掛満ちてくる)

伊勢吉

病身でただ名月も見えるばかり

(名月もただ見るばかり病める身の年金のもらえる月が祭り月)

(年金の月と祭りが一緒に来)

スモッグに包まれたまま月生まる

(スモッグのベールかぶって月生れ)

故郷を車窓に捨てて月に立つ

(古里の月を車窓になつかしむ)

月光と響く汐の香十三夜

(十三夜静かに汐と対話する)

満ち欠けをしてお月さん笑ってる

(満ちて笑み欠けても笑うお月さま)

月末のペクリかえしくりかえし

手の届くレモンの月が丸く見え

(手が届きそうレモンのようなお月さま)

名月へ齢を忘れて感傷し

(名月へ乙女の感傷通り)

臨月の妻へいたわりひとしおに

(臨月の妻をいたわる語を探す)

野良犬へ腹の足しにもならぬ月

満月がころがり落ちる一瞬

(満月がころがり落ちる松の枝)

見る窓の違いを月はそれぞれに

(窓窓へ月それぞれの風情見せ)

屋上で恋を囁く月と雲

児に指を差させて月を仰ぐ母

(抱いた児に月指差させ指差させ)

母と子が月を見上げた里の道

(里の月母子の視線吸い上げる)

(名月をも一度見よう午前二時)

水鏡月をうつして洗ひし月

(名月をうつして微笑む水鏡)

ご利益はまだ下さらぬ月参り

月末のやりくり子らはケチと云う

沿線の峰はねる月旅の窓

(峰つたい月がはねてる旅の窓)

終電の客いい月と語り去に

(終電の客へ名月笑みかける)

名月が優雅に見せる琴の音

(名月が琴の音艶に冴えさせる)

女子寮をホームシックにさせる月

出迎えの妻と歩が合う月の道

人類に踏みにじられたを月忘れ

(人間が足跡つけたと月知らず)

月並の言葉も温し慰斗包

月を呼ぶすきに虫の音楽隊

(虫の譜に合わせてすき月を呼ぶ)

たくらみの心も月に寄り切りられ

(たくらみの心も月に笑われる)

残業の体に月の思いやり

(残業の五体を月にいたわれ)

野良犬の何を思ふか月を見る

月からの優しいうたに耳を貸す

(月の詩しずかに聞く窓開く)

裏おもて黙って見てる丸い月

電化した無理が糸引く月払い

雲隠れ月も二人へ気を利かし

(アベックへ粋を利かして月隠れ)

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大 萬 川 柳

「気まま」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 五百十五句
 入選 六十一句

定年後の気ままも父の夢となり

岡山 柳五郎
 とじこめた気ままを里の母に出し

鳥取 静 泉
 真ん中に生れて気まま通されず

堺 一 舟
 川だとして気ままに流れ変えられず

鳥取 三 和
 惚れている弱味気ままがまた可愛

鳥取 茶 人
 紋付きの朝も気ままな髪のかせ

寝屋川 恵美子
 ときどきの気ままがうれい生さぬ仲

大阪 君子
 気ままなど許さぬ朝の靴を履く

和歌山 幸
 三十路では気ままも云えず釣書

大阪 幸子
 く これしきの気ままを許す過去の汗

和歌山 武雄
 気ままな旅しても心は満たされず

和歌山 としよ

適当に気ままも云うてくれる夫

堺 天 笑
 あまえ子の気ままを通し親は負け

大阪 モ ト
 人前だけ夫唱婦隨にする気まま

大阪 真 砂
 気まま叱ったらこんどはヒステリ

大阪 文 秋
 清涼剤のような未っ子の気まま

堺 千 子
 兄の気まままたばあちゃんか叱ら

松原 サ ヨ
 れる 籠の鳥気ままに流れ雲を追う

八 尾 幸
 ふところの金が気ままな口を利き

尼崎 利 美
 名工の気ままはそれも箔となり

西宮 多 志
 気ままとは知っても沽券を押し通

西宮 百 酒
 し 屋敷する姑の気ままをとかめまい

東 予 悠 泉

年寄りの気まま孤独のかげを投げ

鳥取 露 杖
 日曜も気ままにさせぬ孫が居り

岡山 金太郎
 ささやかな気ままが出来る妻のる

倉敷 素身郎
 す 浮き草の気まま流れに逆らわす

倉敷 里 風
 終着はやつぱり我が家さま旅

大阪 敬
 箒の鳥狭さの中にある気まま

枚方 弘
 ひとりです気ままですよは瘦せ我

大阪 ふ み
 慢 盆栽の嘆き気ままに生きたくて

大阪 満津子
 気ままでもよい生きていてはしか

守口 右 近
 った サラリーが上司の気ままに耐えさ

大阪 一 休
 せる ほとどに気ままが出来るいい身

大阪 恒 治
 分 野良犬も気ままに道路渡れない

大阪 勝 美
 家中の気ままを包むまいる母

富田 優
 ひとときの気ままが欲しい人気歌

平田 代 男
 手 タンポポの気ままも風に逆らえず

十二月越せば気ままになれそうだ

八 尾 鬼 遊

子の気ままついつい甘い共稼ぎ
 権力でも気ままにならぬ風と空

大阪 頂留子
 母だけにわかる気ままな娘の悩み

お互の気まま許して血を温め

富田 花 梢
 淋しさと隣り合せの気ままなり

義母だから気まま許したかも知れ

ぬ 朝顔の蔓の気ままを許しとき

大阪 道 子
 万円札気ままに使ってみたい夢

年金で気ままな余生とも云えず

外孫を気ままにさせて二三日

持参金気ままな妻にしてしま

嫁ぐ日が近く気まま許される

倉敷 方 大
 彼にだけ気ままを見せた恋であり

ハイミスの気まま通してやる家族

大阪 柳 信

佳 句
 名木は気ままに育ったわけでなし
 気ままにはさせぬと財布の口にき
 る 一つ見ても気ままに遊んでい
 ンダ 笠岡 古 庵
 回復期出てきた気ままよろこば

大 阪 弘 生
レール敷かれると気ままになりた
がる
寝屋川 度
独り居の気まま寂しい虚勢とも

鳥 取 露 枕
人ノ句
気ままから云うてる愚痴と気がつ
かず
橋 本 木 魚
地ノ句

和歌山 寿子
ペン先の気ままを許している日記

天ノ句
母性愛くすぐる夫の気ままぐせ
大 阪 あいき

NHK川柳募集

課題 「来年」 ハガキに三句
選者 川村好郎

十二月十日までに左記へ投句
郵便番号五四〇 大阪市東区馬場町

NHK近畿本部

入選発表 十二月二十四日(土) NHKラ
ジオ 第一放送(全国放送)午
前九時十五分

★ 「老後をたのしく」の時間

川柳塔社常任理事会(11月4日)

待望?の雨。とは云え今日は常任理事会

選者吟
目のとどく範囲で気まま許す父
昭和五十二年
ベストテン(十月現在)

一	花 笑	二六五	富田林	一一〇	多 志	一四、〇	西 宮
二	天 笑	二四五	堺	一一一	幽 玄	一四、〇	東 大 阪
三	幸 花	一七五	和歌山	一一二	鬼 遊	一四、〇	羽 曳 野
四	夕 花	一七五	堺	一一三	君 子	一三、五	八 尾
五	好 一	一七五	堺	一一四	露 杖	一三、〇	大 阪
六	真 砂	一七〇	大 阪	一一五	可 住	一三、〇	兵 庫
七	憲 祐	一六五	大 阪	一一六	軒 太 楼	一一、〇	鳥 取
八	美 幸	一六〇	八 尾	一一七	智 子	一一、〇	大 田
九	幸 祐	一六〇	八 尾	一一八	道 子	一〇、五	大 阪
				一一九	弥 生	一〇、五	八 尾
				一二〇	本 蔭 棒	一〇、五	奈 良
				一二一	宵 明	一〇、五	今 治

二四 あいき 一〇、〇 大 阪
以下略
昭和五十三年第一回
「再起」ハガキで三句以内
締切 十二月二十五日

第二回
「松」 三句以内
締切 一月二十五日

投句先
〒593 堺市堀上緑町一三三七
藤井一二三方
大 萬 川 柳 係

である。出足が危なげられたが、これはど
うしたことか14名出席という盛会だ。湯呑
み茶碗が足りない。

まず生々庵主幹が、村田颯太氏からの本
社発展費としての金一封、野村太茂津氏が
同人三氏を推せんされた熱意などに敬意を
はらわれた。

同人諸氏の原稿の内容などにも触れる発
言があったが、これは受け取り方にも個人
差があつて、かと云つて戦時中のようなへ
タな検閲制度もおかしいし、結果的には各
氏の自制を待つよりはかはないだろう。

新しく理事に推せんされた方々と、新春
懇親宴を兼ねて初顔合わせを1月22日の予
定で催されることになった。会場は心斎橋
の大成閣が予定されている。

この会合のテーマなどは後日ご通知する
ことになっている。往復ハガキを落掌され
たら、出欠だけは早くお知らせねがわない
と係りがこまるのでよろしくお願いいたし
ます。全国の理事諸氏にもご出席ねがいた
いものの、遠隔すぎてもムリかも知れませ
んの、ご希望の方は早目に本社編集部ま
でご通知のほどを。本極まりではない
が、理事の会合は新年懇親会と、10月の同
人総会の一時間ばかり前にもつことになる
かも知れない。

今夜は「涙ぐましい」美談ばかりであつ
た。(次回は十二月二日)
出席―形水・葵・柳志・太茂津・水客・
紫香・萬の・百酒・薫風・牧人・生々庵・
岳人・好郎・一三夫諸氏。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

お問合わせは東京都豊島区北大塚一の三三。シャレエ大塚台森林書房内短詩形文学懇話会仮事務所へ一頒価七百円・送料百二十円(振替口座東京(8)八三二〇〇森林書房。

つ折りにされたもの。誌齡三〇〇号記念合同句集「川柳ひろしま」発刊記念・第28回新年交歓三十六題川柳大会が53年1月8日午前9時から広島打越町「三篠公民館」で開催。題

岩橋芳朗著
句集「白い流れ」
正に豪華版である。
序文・青木三碧
跋文・森中恵美子
一輪になったメダカの群れはあなどれぬ
裏切りの手にきりきりと独楽が舞う
発行所一丁640和歌山市尾形町四丁目六・芳朗。岩橋

定価・千五百円

▼日川協全常任理事協議会が8月20日大阪市北区の弥生会館で開催。本社から生々庵主幹と栗副主幹が出席

▼鳥取県川柳作家協会設立。会長に河村日満、副会長に小林由多香、奥谷弘朗車楽。専務理事に葉士人。常務理事に能生。理事に両川洋々、森田布堂、石垣花子、小西雄々、蟬々、監事に石花菜、松下たつみ諸氏。本社同人の活躍が望まれる。

▼鳥取市文化団体協議会理事に小林由多香氏、鳥取文芸懇話会理事に大塚豊生氏が選ばれ本社同人が活躍されている。

▼若本多久志氏(西宮市)は徐々健康をとり戻し、12月7日の本社句会で柳話をされることになった。

▼傍島静馬氏(宝塚市)から1日課の散歩を徐々に延ばしているものの、句会出席はまだまだとのこと。ステッキにクスリと名刺が要る散歩。

▼短詩形文学(第2号)では「短詩形文学懇話会賞」を設定を発表。「前略、俳句・川柳・短歌その他の短詩形文学の進歩派を糾合し、短詩形各ジャンルの人々によびかけ、共同の研究と交流の場をもつことを行なおう」と宣言している。

▼川柳平城の会(奈良市西大寺国見町一の一の四一)が創立十周年を記念して珍らしいミニ句集を刊行。「組句集・平城」に名を連ねる人、勢火・定子・長生・秀米・三求・樹王・欣之・まさき・一高・笛生・一風・敏海・佐伊知・高山の15氏。色とりどりの印刷紙に各50句ずつが四

▼秋田実氏(大阪市)急逝一氏は10月27日未明大阪府立大学付属病院で大網しゅうようのため死去。七十二歳一本誌の不二田一三夫氏は秋田先生の愛弟子として知られる。なお雑誌「漫才」は第10号を秋田実先生追悼

▼尼緑之助氏(出雲市)から52年度の島根県芸術文化祭の川柳の部の金賞は一清賀の極まるところ父の声一飯塚虎秋氏でし。

▼森井善居氏(竹原市)から今年はずいといまして本職の方でも(簡易保険)最高優績表彰をうけたり、長女の「愛」が簡易保険作文コンクールで中国郵政局長賞にかがやきましたと。

▼梅鈴庵不酔氏(姫路市)

大阪文化連盟から「地方文

化の興隆に寄与した功績により」と表彰され、賞状と記念品が授与された。

▼梅鈴庵不酔氏(姫路市)

大阪文化連盟から「地方文

から編集部へ陣中見舞が届けられた。お礼申します。

▼若柳潮花氏（高槻市）は水客、紫香両氏と静馬氏を見舞われたが、まだ杖にすがるの歩行とのこと。

▼小畠無聖氏（宝塚市）は左眼が白内障になり絶望的とか。11月中は病院生活らしく、一日も早いご退院を祈ります。

▼村上旭童氏（愛媛県）から一家を建てたり父が亡くなったたり、つらい無沙汰を

▼正本水客氏
らー梶川蘇堂
鉄川柳会主催
た。ふ社から
出氏らが出席
い誓得寺でし

（大阪市）かな句箋に記入、裏面に雅号を追句会を大いにやりまし
て、二也・日の場所を懐し
た。

内）投句、各一句毎、適当な句箋に記入、裏面に雅号記入、郵券百円同封。投句先〒581-1八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸。

▼堺川柳会は12日（月）午後六時から八木摩天郎居

六時から松崎町三丁目大萬で、題は「展望」「フィナーレ」「しんがり」「リボーン」

▼川柳東大阪は24日(第4日曜)午後六時から東大阪市立中央公民館二階、第二

△旅 信△

西山幸

桑原道夫

松原 寿子

古ふる
川かわ
奮ふん
水すい

—水客·客遊子·推薦—

▼南海川柳会は15日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「着ぶくれ」「暴走」「一人よがり」

▼南大阪川柳会は20日午後

「コーナー」。席題は一題
(当日発表)。
一月の本社句会は九日
(月) 六時開会

一月の本社句会は九日
(月) 六時開会

▼檜谷漫柳氏から―旧部下
と飯板の湯を流し合い―浅
虫に陸奥の帆立を苦く食う
―みちのくに酔う八幡平と
いう地酒―漫柳。

▼12月の句会▲

▼菜の花旬会は10日(土)
夕六時から西郷会館(八尾
神社境内)近鉄大阪線八尾
下車南へ歩約一分。会費三
百円。兼題「民族」迫る。
「ジンクス」「地獄」席題
二題(兼・席題共各五句以



本社十一月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

秋が深みゆくーいよいよ作句シーズンである。今日は他社のおレキレキの友情出席で会場を盛り立ててくださった。定金冬二氏、田中好啓氏、西村芳川氏、室田千尋氏をはじめ初出席の山本三郎氏、松本涼一氏にとぎやかである。

柳話の戸田古方氏は「川柳のいのち」と題して、理想追及の命題「われわれは幸せを求める」を声量ゆたかに語られる。

内容の幅が広いのでスペースがたりない。いずれ活字になるので省略させていただきますが「川柳は十七音字の人間陶冶の詩」がテーマの中心である。氏はこの不滅の言葉を、「川柳とは十七音字の人間のつくった人間を人間にするうた」といい直し、これを分析して「われわれは人間である」と、もうひとつ「われわれは幸せを求める」とし、二つの接合点に川柳があると思うと述べられる。

蓮の花が泥の中から生まれるように、美しい真つ白い蓮の花を開かすものが川柳だと結ばれた。

十一月の月間賞杯は和歌山の津田与史氏にかがやいた。無人の野を行くように和歌山勢の進撃は見事である。

(受付・児島与呂志・塩満敏)

(進行・記録・高杉鬼遊)

出席―古方・敏・与呂志・雅風・滋雀・冬二・蘭・太茂津・与史・漫柳・千寿子・維久子・夕花・三郎・水客・右近・一三夫・天笑・千万子・恵美子・百酒・みずほ・栞・誓二・文秋・喜風・美幸・としよ・幸・きみ・武男・紫香・勝美・柳志・とし子・瓢太・花梢・喜甲・規不風・肖二・綾女・醉升・吸江・一舟・好郎・弥生・川狂子・芳川・酔々・雀踊子・小松園・牧人・千尋・好啓・形水・宇宙太・庸佑・三十四・度・寿美子・涼一・凡九郎・鬼遊・薫風・岳人・葉子。

席題「清流」

定金 冬二選

意味のある言葉をじつと聞く清流
清流へ掉さしいつかぐればはじめ
素ツ裸の俺に清流澄み過ぎる
清流に葉が突きさるきりきり
清流が故郷の空を青にする
清流を少しにこしただけの恋
おだやかな心へ清流の音がする
清流に都会の塵がひとつ浮く
人里にきて清流を過去にする
清流を眺めて人間石になる
清流が汚れた傷をさかなくて
清流をかなしと思う囀

芳川 吸江 太茂津 紫香 喜風 寿美子 千寿子 天笑 凡九郎 雀踊子 寿美子

清流の底に目高の城がある
人間不信清流の息ひそむ
清流に逆らう石の丸くなり
清流をながめて軽い眩暈かな
清流のあすは都会の川になり
季節はずれの清流だから透き通る
足音なんていらぬと清流のモノローグ
清流に掉さし異端児を自認する
清流の滝にざんげを強いられる
清流に一匹浮いたのが人魚
清流に黄色い帽子見つけたら
清流に棲んで臭いのない孤独
清流に育ち疑うこと知らず
清流で育つ魚のエゴイズム
清流の魚に昼寝の場所がない
清流に私のページ切り流す
清流のお伽噺を遡る
母の亡い鬼は清流さかのぼる
武器もたぬ男が流れている清流
清流に育ちしぶとく生きられず
清流の児童はいずれ死ぬだろう
清流の罫で紙幣をよんでいる
清流に真直に立つ独楽の芯
清流で磨くわたしの知恵の輪よ

席題「井戸」

西村 芳川選

二つ井戸名残りどめる栗おこし
井戸替えを忘れさせない落し物
古井戸が涸れて不吉な予言する
井戸の秘話戦史につづる大阪城

勝美 百酒 牧人 一三夫

柳志 きみ 滋雀 雀踊子 柳志 天笑 凡九郎 水客 規不風 芳川 一三夫 百酒 夕花 鬼遊 形水 漫柳 滋雀 美幸 岳人 瓢太 鬼遊 冬二

珍客へ旧家で貰うお茶の水

盛衰を見てきた井戸のある旧家

肉親の声を故郷の井戸に聞く

スイスイと湧き水小魚踊る井戸

汲上げる程透き通る井戸の水

底知れぬ井戸に小さな空写す

踏絵の足ゆつくり洗う井戸がある

こだまして古井戸遠い童唄

古井戸が主役となつているドラマ

御先祖の顔を偲んで覗く井戸

井戸水を伝えた先祖の墓洗う

井戸水を汲むと聴こえる子守唄

井戸に蓋して伝説を残しとく

立札をよんで古井戸又のぞき

なつかしい話へ井戸が生きて来る

井戸一つ残し本陣消え果てる

古里の井戸水母の味がする

順々に古井戸のぞく城の昼

濁水にあわてる井戸のない都会

井戸水のうまさ口紅などつけぬ

車井戸明治の深い音がする

うらみ節うたいつけよかくれ井戸

断水に旧家の井戸が物を言い

母のなきでふるさとの井戸深くなる

諦めが悟りになる井戸の中

井戸水で先祖の墓を洗う幸

井戸のある長屋の人情あたたかい

人妻と歩くと井戸は冬になる

町名もここから変る井戸の水

一舟

好郎

醉々

川狂子

維久子

維久子

醉々

太茂津

与史

右近

雅風

冬二

紫香

幸

美幸

三十四

葉

文秋

寿美子

天笑

柳志

冬二

鬼遊

涼一

雀踊子

岳人

芳川

兼題「染める」

板尾

岳人選

夕焼けに染まつて枯木燃えてくる

風よりも美しく布染めあげる

白を着て貴方の色に染まります

染めるにはおいしい昔の色や柄

髪染めていたので齢を言いそびれ

金髪に染め天使は夜を飛ぶ

正直な鏡が染めよと言っている

染め直し出来る着物を買われる

松茸に染まつて話す落語かな

染められて山の匂いを吸う男

染め替えて結局最後母が着る

国境の兵士を染めている夕陽

街染める夕陽にくさの彩がある

白髪染め以後の帽子を忘れ果つ

キリンの首の長さを夕陽が染める

都会には私を染める色がない

保護色に染つて蛙むくなり

その家に染まる言葉によっている

夕焼けがおととき話の村に見せ

染めかえのうまい女でまだひとり

白惚れへ妻も染まつていく虚栄

白旗を染める言葉を選っている

或る出逢いおんなの恋を染めかえる

染まりたい人へ女は白くなる

めし染める梅干一つに母が在る

狐火に染まる女の傷がある

小さい部屋を夕陽がありつたけ染める

くに捨てた女を染める赤とんぼ

山に染まつて朝鮮漬けが好きになる

青鬼の白惚れ赤く染まらない

兼題「配列」

香川

醉々選

配列の色で勝負が果物屋

配列へ明日の新手を考える

設計図また配列を変えてみる

貴金屬配列をする息をとめ

配列が乱れる裏切りひとりいる

配列が終るとラツバ鳴りひびく

配列のタブー幹事含んとき

不況打破機の配列変えてみる

配列を変えてもかえても四帖半

マイホーム家具の配列又変える

いろは順に列べてしぶ妥協する

学歴の差で配列がまた変り

ちよつとだけ配列悪いだけの顔

アイウエオの配列にする平和主義

万物の霊長と言う配列に居るつもり

配列のそのまん中に美人居る

無縁仏春の陽しはそれぞれに

配列を変える思想を憎めない

機の配列気になり出した四十歳

一匹狼で配列を嫌い抜く

天才とバカに配列などはない

配列をかえても鬼は鬼である

配列に金の力が匂うなり

配列を変えたらアミダくじ当る

配列の中途で背文字に引き込まれ

配列の一所真空地帯です

好啓

岳人

柳信

醉升

千乃子

芦川

弥生

寿美子

喜甲

敏

度

寿美子

太茂津

滋雀

庸佑

葉

凡九郎

花梢

天笑

滋雀

与史

天笑

好啓

冬二

小松園

敏

太茂津

凡九郎

配列はあなたを盾にする位置で
冬が来て桶の配列など思う
配列を変えるボタンを押すだろう
配列の伽藍目に滲む秋室生

兼題「城跡」

黒川

兼香選

城跡に立つてガイドのひとつきり
城跡は僕の母校のあるところ
城跡の井戸に偶話が一つある
堀の水澄んでいくように遠くいる
城跡にもつとも似合う秋の風
城跡の石はつぶやくように朽ち
城跡へ登ると刀が差したくなる
城跡の石にも歴史がある匂い
城跡語らず雲のメロディ聞いている
城跡に登れば一望の城下街
城跡に餓鬼大将の喚声が
句碑一つ抱いて城跡秋に居る
城跡へ犬が一匹迷つて
税金でどうやら城跡保たれる
城跡で雄叫びと聞く風の音
城跡に沈む夕陽にあるロマン
傷心の日は城跡の石に倚る
城跡の蛇にガイドの声ふるえ
公園に城跡永く親しまれ
城跡に赤いパンツがはしてある
銃眼の景色を愛でる城の跡
城跡に埋もれたロマンを風に聞く
城跡の松が寝返り知つていた
城跡の夏草幻の関の声
城跡にむかしのまんまの月が出る

夕花 好啓 度々 醉々 登美也 邦晴 冬二 寿美子 天笑 滋雀 与史 水客 誓二 漫柳 勝美 一三夫 肖二 宇宙太 寿美子 静馬 千尋 風 千尋 どんたく 滋雀 鬼遊 太茂津 庸佑

城跡の歴史階段丸くなり
荒城の月を城跡奪い合い
城跡の残暑を走っているトカゲ
淀城趾ひずめの音は今もなお
城跡の名残りは堀があつただけ
城跡を訪ねるものは風ばかり
城跡で見る夕焼けが歌になる
朽ち果てた城跡夕焼けあるばかり
七曲りして城跡の雨にある歴史
城跡を出るとブランコ揺れている
城跡の朝を引き裂く寒稽古
城跡に何か動いている怖わき

兼題「瓶」

西尾

千茂子 千尋 好一 鬼遊 滋雀 好郎 水客 維久子 宇宙太 紫香 栗選 柳信 登美也 太茂津 天笑 喜風 小松園 千尋 冬二 宇宙太 好郎 牧人 維久子 喜甲 雀踊子 庸佑 千尋

ボトルのなかの自分がだんだん遠くなる水客
雑兵の一番好きな一升瓶
一升瓶抱いて男は喪に服す
瓶で搗く米の苦勞も語り草
ナポレオンつめかえたらしい瓶のいろ
古清水の花の多きを嫌う瓶
鉄瓶がいろいろに置きよき文化
一合瓶正味がうれしい立ち呑み屋
空瓶にコスモス差して淋しい日
空瓶を残し隣は越して行き
グループが去んで空瓶ひとつ増え
青い瓶シルクロードを知っており
角瓶へよくぞ男に生れたら
火災瓶投げた過去はひた隠す
化粧瓶の数で美人にはなれぬ
音たてて瓶の口から出る甘露
一輪の菊で花瓶がする呼吸
雪国の民話を鉄瓶温める
瓶づめにすると別れは美しい
女来てワインの瓶に秋を挿し
作品を忘れてダルマ瓶ころぶ
香水の瓶を卑弥呼に奉る
瓶割れる音あやう団地秋深む
一升瓶から口のみにして世をすねる
フラスコの底で世界がくつがえる
瓶の美しさに恐れる指紋
媚をもつ女で瓶づめには出来ず
華道展花瓶も一とくせある形
瓶詰の蓋々々回しまだ開かず

水客 美幸 夕花 醉升 千茂子 小松園 武雄 百酒 寿美子 美幸 宇宙太 芳川 誓二 維久子 醉升 凡九郎 弥生 与志 好啓 醉々 美幸 千尋 水客 紫香 弥生 与史 栗



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣史好報

仕合せな野菊仏に飾られる
小便をするところが溢れ出す
質上げの時だけ斗志溢れさせ
抱き上げた母の両手の広さかな
黒髪は溢れ肩凝る未亡人
叱られるだけに呼ばれた大広間
広い手に男の夢を埋めてみる
グラビアの女溢れて塵箱に
お祈りが溢れる鶴なら飛ぶだろう
汽車の窓祖国は広く稔る秋
思うまま無縁仏に咲く野菊
玉手箱溢れて愛が冷えてくる
美しい夕日に溶けていく鉛
菊作の父の背中に孤独見る
み仏の広い心身を沈め
子等育ち二人に還る広さかな
呑みこんだ鉛が胸にある別れ
南海電鉄川柳会（大阪市） 辻圭水報
通行止めになっても顔パス来て通り 摩天郎

通行止めなんやら偉い人やそう
通行止めおかげで終に乗りおくれ
金貸して通行止めの友を悔い
通行止のままで定年来て終い
好奇心通行止へ足を突入れ
通行止ガスもれだから寄りつかず
通行止へ廻り道した椅子にいろ
通行止祭り太鼓を遠く聞き
二百海里これから向うは通行止
近所まで帰って通行止に逢い
通行止無視暴走族に泣かされて
あいつにはコネがあるぞとなぐさめる

津田与史報

川柳わかやま

天狗の鼻折って天狗になっている
包みきれぬ今日よろこびの父となり
真黒な紐天窓の歴史です
捨てられる迄華麗な包装紙
俾せへはむ心は包めない
押し込む愛は火種を抱えている
孫の手に包み切れない誕生日
包むだけ包めばさつさと子が帰る
包装紙一流店の名が歩き
一泊をあれもこれもと包む母
想い出を包んで消えない夏の雲
秋の香を包み切れない里土産
包みきれぬ笑顔青春だけかしら
腹立ちも大風呂敷に包み込み
行き合うて天狗同志が火花散る
マスコミの天狗になってから落ち目
釣天狗少し道具に敗けている

恒明 圭水 宏子 千万子 勝美 柳信 維久子 雅風 東雲 誓二 ミツエ 貞子 太茂津 英子 佐知子 公子 和子 登紀夫 冬花 知也 善彦 一彦 一義 さだ子 かず代 裕美 保夫 緑楼

窓の外ばかり見ている乗り過し
嬉しい日愛の小窓を開け放つ
天窓の月が知ってる睦まじさ

川柳後楽（岡山市）

井上柳五郎報

人の倍働きゃつと並の運
これも運氣弱な男なだめられ
運にして誰にも言わないまま別れ
仲人に乗せられたのが運のつき
門口まで来た幸運が通り過ぎ
定石を歩いて運に恵まれず
運命線ほめられ運は向いて来ず
歯ざしりも借り物の歯で頼りなし
ずり落ちる入歯にしてよくしゃべり
葬列の出歯が笑ったように見え
歯の抜けた亡母の席にも箸があり
腹立たんかと他人様が歯痒ゆがり
あわてるなまだ脈がある救急車
駄馬としても慌てないマイペース
ピーポが一寸あわてて頼もしい
逃げ道がなくなり嘘があわて出し
帰宅して無駄と気がつく大廉売
無駄話刑事はチャンと聞いており
嫁が捨てて姑が無駄と拾って来
無駄口が出た難題も片が着き
無駄にした過去を繕う再起の日

川柳東大阪

竹中肖二報

十郎 白光子 茂子 恒洋 紫峰 博友 正道 胡風 昌吾 哲郎 ひろし 久米雄 秋平 柳五郎 元一 草風 恒洋 夏彦 三平 佐加恵 照路 梁太 秋月 文秋 凡九郎 千代子 恒明

実力の世に素性など云うとれず
 二の腕の竜がやはりとうなずかせ
 成り金の素性がわかる庭の石
 入れ墨で素性がわかる鳥婦り
 素性などどうでもいさ一目惚れ
 さり気なく素性を包む葉つ葉服
 寝つかれぬ夜半にうんざり猫の恋
 冷房車出ればうんざりする暑さ
 リリフ投手うんざりさせたホームラン
 洗濯に女の愛さも少し晴れ
 母ちゃんの気晴しちらし寿司で済み
 スーパーに主婦のため息捨ててある
 スーパーで会う顔同じ時同じ
 スーパーの裏で野良犬肥えている
 スーパーの横で小売は生き続け
 教科書で立派な嘘を教えられ
 西宮北口川柳会
 小浜牧人報
 白い楽譜さのうの音がみな残る
 洗っても洗ってもおかめの顔である
 大夕焼私も町も染めてゆき
 仕舞風呂洗って星へ話しかけ
 死舞のない恋文を娘書き
 吾が孤独かす多弁と人知らず
 原稿の樹目埋まらず旅に出る
 北海道の大自然に心洗われる
 四角張る嫁の挨拶いとほしく
 鶴を折る子へ真四角に切つてやり
 舌の傷言葉の刺にささったか
 騙されて騙して穴へ落ちてゆく
 土砂降りに洗つてもらう野の地蔵

柳宏子 美子 鎮彦 綾女 柳信 右近 好一 肖二 誓二 喜風 三十四 美幸 一栄 度 雅風 古啓 伊人 牧人 喜久甫 政甫 豊子 山 半歩 千世子 とし女 正祐 泉女 総浦 清川

罪洗う度に十字架重くなる
 キノコ雲見た幻想に目を洗う
 ハンカチに包む倅せもろてくる
 京都塔の会
 燃えさかる五山へ京は威儀正す
 糸口をさぐる話題を変えてみる
 もう朝のおしやべり宿の女客
 戸隠のそばがおいしい旅便り
 金色に月が砕けて波になり
 名月に微笑こぼして羅漢たつ
 青空がきれいな妻の命は消えてゆく
 評論家勝手な立場で批判をし
 勝手ですけどと無心勝手すぎ
 こぼれ種勝手に咲いた花でよし
 音たてて転ぶ山鉦小京都
 大欠伸あごの関節はずれそう
 梯子酒へ月が呆れてついて来る
 首は操練して幸せな日を終る
 オエスケール川柳会
 停年の日そつとはずす住所録
 私のでん分はと遺産分け
 念入りに住所聞かれて留守でできず
 寄附集めが住所は間違えす
 ひかえ目な女幸福はなさない
 私を表面に出せぬ宮仕え
 控え目には電車に乗れません
 三列目ぐらゐに自分の席を置く
 鏡台に写らぬ別の私が居
 私の足引っぱっている私
 住所録友一人減り二人減り

婦美子 めぐる 紅扇 求芽 明代 紫香 美穂 潮花 笛珠 王石 よし子 飛鳥 杜的 和友 三求 白溪 水客 貞彦 千夢 幸坊 博泉 みどり 聖地 野生 亜也子 有秋 春秋

私がうろたえている女の目
 私の切替えタイムレコーダー
 よくきれる腕が住所を変えてゆく
 どん底でほんとの私と対峙する
 控え目に仕入信用保つ店
 一枚の枯葉に私を置いてみる
 川柳しんぐう
 突然でなどと土産持ってこず
 小さい丸い母の背中にある強さ
 ちちははの愛の強さに気がつかず
 泣けるだけ泣いて女は強くなる
 口数の少ない中にも気の強さ
 パーゲンで押しの強さを持ち帰り
 じっくりと話せば同じ血が流れ
 柔かな鞭じっくりと骨にしみ
 じっくりと聞けばあなに罪がある
 じっくりと聞けばあなに罪がある
 この母に強い意志あり村去らず
 仏壇へ無理な願いをしては詫び
 仏壇の返事が欲しい母の愚痴
 仏壇へ素顔で求めている祈り
 こともない仏壇に座す母淋し
 仏壇に類づく祖母の背のまろみ
 仏壇の金の屏にたかる蠅
 仏壇は愚痴も悩みも聞いてくれ
 仏壇もお盆で珍らし顔に逢い
 口下手がじっくりしこり大きくし
 川柳たけはら
 妄言多謝一行で足る怒り
 だしぬけに白髪が増えたなと夫

一念 一扇 亜成 形水 入仙 好郎 澄孝 大輪 多四郎 金松 雀踊子 武雄 富子 よしほ 弘生 寿孝 義孝 平城 恒治 まさ子 としよ 千寿子 静水 房子

嫁がせた五月のままのカレンダー
休耕田食糧危機を叫んでる
セミぐれふと鳴き止んだぶきみさよ

修繕がまだききそうだ松葉杖
かたらいの中にとけてる渚の灯
働かぬ指の白さにみとれてた

ある不幸信じることを忘れてた
明日は知らず今日のカンナの朱を愛す
倅せは老いて夫婦がまめな日々

差支えないから妻に添うておく
知らんふりしとこ子供がねだつて
自由研究自由なようでもつかしい

夏休み無縁の職で朝を出る
来竹桃怨念消えぬ深紅に燃え
ライバルがいるな台本間違える

四十八手使い果たして敗者たり
君が代を歌えば火薬のかざがする
おとうさんあんまりのむなしはいね

パレットの色をにこらす嫉妬心
南大阪川柳会
星も月も話題になって恋進む

老夫婦話題なければいけないでよし
戦争を話題にはせぬ義足鳴る
切札は女の涙かも知れぬ

全身で女切札待っている
切札を一枚持って笑えない
妥結してから切札を笑い合い

蘭幸 鈍舟 笑子 鬼焼 紫光 政己 寛子 不朽 かつ子 薔居 小五愛 一路 節夫 貞子 英詩 小のり 西合 中川滋雀報 あいき 文秋 酔々 久子 智子 柳志 雅風 凡九郎 一栄

売れっ子になって孤独に耐えている
売れっ子のひとり静かな夜が欲しい
売れっ子の類に一つの泣きほくろ

スポーツで鍛えた男のかけがない
青春の日記スポーツだけでよし
準優勝旗同じ涙の汗と知り

こころぎが鳴くとスポーツしたくなる
ババの嘘さぐる一本多くつけ
時々は姑さぐりに来る別居

ライバルの動きをさぐる石を投げ
城北川柳会
泳ぎ抜き還るを信じ稚魚放つ

大都会泳ぐセールの陽が落ちる
泳がせて泳いで浮世の夫婦舟
クロールの孫へ明治の水府流

蝶々もバツタも泳ぐネオン河
官界を上手に泳ぎ天下り
ふるさとで日がな一日泳いで来

孫の守り秋晴れの野を共に駆け
もっ限界言つて気を引くおじさん
限界を知らぬ十五のやき男

限界は自分がよく知ってます
限界を思いだまだとも思
限界を超して男の貌ができ

熱帯魚泳ぐクラブの夏のみま
泳ぐ奴水かきあれば俺だって
読書する少年の瞳澄んでいる

肖二 牧人 勝美 恒明 君明 滋雀 喜風 好郎 形水 満津子 道子 弘生 秀村 ふみ ますえ 惠美子 恒治 千子 千子 三十四 右近 幸生 一休 弘斗 星斗 喜代子 喜洗

川柳ささやま 河原みのる報
通り魔か瑞穂の稲を吹き倒し
通せんぼして欲しい気を見抜かれる

人生の素通り八十路に残る悔
みんない先輩でいて金がない
手拍子に乘らぬ先輩もてあまし

ロッキード先輩の仕末へ行き詰り
教科書に儲けのコツは書いてなし
教科書を頭の黒いシミが喰い

意地を張る女糸口じつと待ち
金蔓の糸口貧乏神が邪魔をする
ほどこまい妻糸口を締め直し

糸口を作るタバコの火を借りる
せつかくの糸口大臣室で切れ
度忘れへ糸口探さず瞳が泳ぎ

五百羅漢糸口吐こうとはしない
佳句地10選 (前月号から)

奥谷弘朗選
金は金恋のけじめはつけておく
覚悟など要らぬ老後の彩を染め

自慢した得手を上手に使われる
結び目がすこしゆるんだ倦怠期
郷に入れば郷に従いする屋敷

結局は自分を化かしている安堵
鎖があるから食いはぐれない犬だ
夕立に駆け込んで来る知らない顔

近江 みのる 村雨 可住 文平 久子 ゆきお 秀峰 喜美代 百合子 越山 無鬼 与志 宗孝 鬼遊 きみ 雀踊子 牧人 弘生 凡九郎 英詩 久米雄 柳宏子 雄々

川柳高知

川竹松風報

星空へ別れた女を恋うてみる
ひとり寝の星占いも凶と出る
新聞を配る子が見る朝の星
東京に住んで故郷の星を恋う
幼い日北斗七星から覚え
星空がきれい子供を呼ぶ屋切
流れ星信じて明日を待つ二人
力泳のビキニ異性を寄せつけず
泳いでもすぐ行きつまる熱帯魚
唇の色叱られるプールの子
上役の電話社用でない小声
台風へ最上役は濡れている
熱帯魚四角な海を泳がされ
夕涼みそんな風情も過去のもの
約束のあきらめきれぬ夢と寝る
洗濯を真夜中にして独り棲む
父を捨て母を捨てやがて芒野
御利益を信じて登る遍路杖
里帰りする坂道の軽い足
ハワイ川柳ウイロー社
もめごとは許す心で和解でき
許すとは口ばかりでしあの色
氣を許し合った楽しい二人旅
子の罪を許して母は世相知り
筆不精長々許し請うて書き
世渡りは許し許されなごやかに
許し合う唇電灯明るすぎ
口答え許しませぬと母しつけ
この辺で許そう娘には明日がある

秋 翠
雅 子
宣 広
ヒ サ
美 江
海 州
麗 子
星 雨
紀 人
紅 雨
芽 十
豊 榮
松 野
菊 野
窓 花
恭 一
美 和子
とみ子
武 司
林蒼蛇樓報
黄 塵
秀 山
辰 朗
一 葉
紅 溪
小 雪
曉 舟
蒼 生
風 影

許し合う日々の暮らしへさす光
許す気の母は裏戸をそとと開け
結局は許してやれと父が折れ
強意見しても眼もとは許してる
子の我が仮許した後で腹が立ち
義理の仲ぐつと堪えて尻ぬぐい
孫のためママにお許し乞うてやり
許す気の母はむつきを縫いはじめ
心得ていますと許してくれた人
一言の許すが言えぬ頑固なもの
許せぬと言いつつ母は泣いていた
うみなり川柳会(鳥取市) 由多香報
生きる世の悩みに四季の冬がある
一円に重さあるらし手から落ち
足音をおぼえた鯉の列つづく
トッパに立ってから新しい悩み
落ちる底に私の蟻地獄
濁水を飲んで地獄の坂落ちる
風紋へ女の吐息落としてた
トラブルをそとと砂丘へ捨てに出る
水滴が落ちて輪廻の川下る
水染めたる宝石鯉に夢をかけ
満腹になってクスリを呑み忘れ
腹一杯と言った遠慮がくやまれる
柿落ちるおちるにまかせて過疎の村
落ちる陽がせつなきほどに赤く燃え
育つ子へ満腹させる鍋が煮え
錦鯉違った顔とわかりかけ
惱みごと一句一句へ放りなげ
連れ添いを食ってカマキリねむくなり
万里歩
峰 円
拜 山
カ 女
十 吉
草 海
蒼 蛇
北 海
三 石
雪 女
公 女
美 智子
笑 王
華 生
熊 生
雄 人
源 太夫
葉 士人
佳 女
辰 春
富 美湖
冬 扇
天 人
とし江
無 人
舟 宏
豊 生
洋 々

満腹の舌があやつる妻楊子
父の香の残ったかたみのしみ落す
大田川柳会 藤田軒太樓報
近代化史跡ガイドもテープ入り
草分けて尋ねる史跡は陽を返す
ここへ来て史跡を偲ぶ佇まい
松風も史跡大古の音で鳴る
史跡巡り日本の古き確かめる
銀山をしのぶ史跡や草いきれ
読み耽けて碁器と茶碗をさし違え
悲しみに耽る女の眼がうつる
見舞文また読み耽る恢復期
瞑想に耽る尼僧の背にも萩
石仏は諸悪ながめて語らない
石仏村の俗化をはがいがり
石仏の顔顔顔に人が住み
真実を語り繕ぐよな石仏
羅漢像温み伝わる母に似て
伝説にロマンを添えて石仏
老境をゆだねる庭に秋が揺れ
呉服屋のひざに転がる秋の柄
むなしさへ秋がひざから駆け上る
代官の碑に蒔一つ秋の暮れ
こま柿を食えば身に沁む過疎の秋
駒つなぎ句会 岸南柳報
日曜の根性コップ酒に手を出さず
根性のあるホステスは手を払い
根性がとりえと子らは知りながら
川柳に根性かけて老知らず
敗戦にふれず根生はめてやり
日 満
由 多香
ぬるを
華 村
九 步
代 仕男
多 賀子
紅 葉
義 雄
秀 子
可 保留
寿 美子
春 梢
軒 太樓
鐘 堂
栄 一
九 二老
緑 之助
露 幹
早 苗
虎 秋
立 雲
ゆう子
雅 風
規 不風
つとむ
祥 恵
信 治

根生のあるのが笑う甲子園

根生はこれからという忙しさ

根生があるときこんな仕込みよう

セールの根生チビッパ靴の裏

根性と若さが決勝迄を投げ

根性がひ弱な体支えてる

根性のおり曲つて墨がすれ

根性の強さを笑う親ゆすり

根性のあるのが主人の気に入られ

荒波に根性のほどを見せる鯛

奉公に出して根性試される

根性をじつとみつめていた恩師

と根性三、六〇〇秒で見せ

根性の蟻人間を慌てさせ

伝統に桶突く手法の鑿の刃え

美しく老いて身軽に足袋をはく

するすると身軽う昇り降りられず

過去かくす尼僧の顔のきよらかさ

ホームラン身軽う踏んだ各ベース

懺悔してまだ隠してる事があり

よろこびをかくしきれない国訛

金策の彼にすまない月見する

年金が充分あれば身軽な身

名月をよそに地下街酔うている

口もとをかくして女らしくなる

善意の輪かくれたところで花が咲き

兄と月見兎の話通じない

自転車で身軽に莢を買うてくる

かくし事出来て歯車かみ合わず

手料理を一品添えてある月見

千代三

はやを

宏子

善信

石拾

勝美

肖二

柳信

綾女

茂子

南柳

育園

潔

小路

小松園

琴音

隆子

一枝

タケシ

野生

一念

江留美

新之助

亜成

博泉

てまり

三郎

亜也子

右近

惠美子

象ある日ひよりの身軽さ悠しくなる

ふるさとの噂異国でする月見

身軽さもたつた一人になる戸籍

月見酒月が出るまが

ボスターの裏に隠した罫がある

蝶々が身軽に象へたむれる

棚上げで一応身軽にしてくる

一瞬の恋蝶々は急降下

肩書のない身軽さがよく喋り

TシャツにGパンハワイへ行くという

身軽さは秋刀魚一びき買うて去る

和歌山七面句会

意地悪をするようメニュー仏蘭西語

街角で風のことばを聞く十月

街角の灯ともりし頃を恋の花

洋食の招き断わりさんま焼く

街角に素的な人を見失なう

ローマン呼ぶ双子鳥やら沖の島

街角に郵便ポストが暮れ残り

洋食へお箸がほしい明治です

ステーキの大きさがう中と外

虹川柳倶楽部

ビッタリ漬物石がない社説

落ちぶれた孔雀が七面鳥になり

揮毫心自問自答の秋に立つ

天主閣雲井に高く運動会

秋の夜ゆず湯に浸り虫を聴く

社会鍋溜るお金は暖かい

吾子だけの座で守れるやチクロママ

如才ないママは一度で名を覚え

度

三千子

ベ女

あい

牧人

亜鈍

形水

小松園

鬼遊

柳宏子

薫風

中筋三幸報

智水庵

幸

昌三郎

太茂津

和美

勇次

光治

寿子

三幸

新岡回天子報

五木

ひろ坊

岩光

春吉

一竿

朴竜

紫浪

災害を島に負けじと鎗の音

開けて迄食べる気はなし袋菓子

溺れた子どこかに生ある気配する

倉吉打吹川柳会

点火釘押せば亡骸燃ゆる音

にくしみかまた燃え上る原爆忌

生命ある限り燃やして悔がない

迎え火も燃えて先祖の道しるべ

燃えた過去無かつた顔でお茶を立て

情熱を燃やす男に望みかけ

燃える火が夜空に浮ぶ山開き

燃えて嫁き別れも早い芸能人

燃える陽を背にうけながら梅を干す

噴煙は天地をこがし有珠火山

御神火に非ず洞爺の山燃える

燃えつきて余生静かに老夫婦

闊魂に燃える若人甲子園

焦がすほど燃えるムードにさせる虫

散歩道同じコースに四季がある

一寸先は闇

それでも明日を

信じたい

(瓢太)

関西奇術教室

校長村田瓢太

勝一

虹汀

回天子

豊生

夕路

嘉子

寿満湖

勇雄

座牛

千恵子

悦子

伊之蔵

満春

観洋

弘朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

朗

・募 集・

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)
「鰯(いわし)」 新谷笑痴 選
「うどん」 有信新之助 選
「吉日」 中川晃男 選

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)
「女の子」 垂井千寿子 選
「祝言」 嘉数千代香 選
「桃」 三井醉夢 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

来月の本社句会は1月9日

本社十二月句会

日時 十二月七日(水) 午後六時
会場 金属会館

南区鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番

柳話

若本 多久志

兼題

「神棚」
「交渉」
「指針」
「人間味」

(今月の出題・児島与呂志)

笠原吸江 選
児島与呂志 選
西田柳宏子 選
川村好郎 選

席題 二題 当日発表
会費 三百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

1月の兼題

「母馬」 「若七」 「水草」

本社 1月句会は1月9日6時
2月句会は2月7日6時

常任理事会

12月2日(金) 5時～7時
一月は休会

お願い!

同人費や購読費は早目にご送金ください。
ご連絡がないと退会とみて送本を中止いたします。
ご協力のほどお願い申し上げます。

川柳塔社運営部

定価 四百円(送料29円)

半年分 二千五百円(送料共)
一年分 四千八百円(送料共)

昭和五十二年十一月二十五日印刷
昭和五十二年十二月一日発行

大阪市内南区鰻谷中之町二〇番通

編集兼 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪市内南区鰻谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一二・三九八五番
振替口座 大阪・二三三六八番

・ペン・ペン草・

52年度の12冊目

★また同じことをいうようだが、ついこの間新年号を送ったところなのに、もう十二月号か、と今年もまた同じ感慨にふけている。

天馬空を行く年に
★同人諸氏のなかに気魄のようなものを感じる今日このごろである。同人申し込み書を送れという、力強いおたよりをよくいただくことである。来年は半年である。飛躍の年でありたい。

カッケ 肉体疲労時の ビタミンB₁補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠



秋田実先生急逝

★古川柳も研究されていた先生だった。かつて和歌山の「七面」で講演していたのだいこともある。故清水白柳氏に頼まれ、一時間ほどお願いしたのだが、その中で三、四句古川柳を例にあげられたが、メモも出さずに暗誦されていたのには驚いた。

★先生は、川柳にも心を動かされたこともあったようだが、川柳を詠む場合「静止」したものに創作力を注がねばならないから止めた

▼葉子コーナ―

▼秋が暖かった異変のせいか、河原のススキが12月というのに半枯れススキの状態です。

▼薄暗がりの道に集団でサワサワ風で鳴るさまは一瞬すい込まれるかと錯覚をします。

▼河原の枯れススキなどと儚いものの響に歌われていますが、冬も根は枯れず、翌年、また花穂をつけるそうです。

▼私も負けずにこの冬を過ごしたいと思います。

と云われたことがある。漫才台本は「動き」が生命だからだ。十何年前、ぼくは「漫才台本に川柳は向かないと思うのが」とおたずねしたことがあった。先生のお言葉一つで、川柳を止めるつもりでいたのである。しかし先生は、「古川柳には漫才的要素がふくまれているから」と、静止と動きのことにはふれられなかった。

★大阪市民文化祭川柳大会にも先生の講演があった。九州の講演先から大阪入りされたのだが、旅客機の都合で少し時間が遅れハラハラした思いがある。その時、戸田古方氏から、秋田先生とは大高時代の同窓であることをうかがった。(10月29日の告別式にはご参列いただいた。)

午前11時の電話

★ぼくを11時まで寝かせてくださるため、どんな急用があっても午前11時までは先生は電話をくださらない。先生は午前4時に起きて机へ向われるのが日課になっていた。それを11時まで待ってくださるのであ

る。その日、9月18日、いつもよりお元気のない声で「また入院する。都合で三度目の手術になるかも知れないので、9月23日の編集会議を中止するから」竜潭「台湾料理」や同人に手配をたのむ。それから23日の午後3時に来てほしい」とのことだった。ちょうどその日から本誌10月号の初校が出始めたのである。正直いって9月18日から10月29日の告別式当日まで、ぼくの頭の中の半分は先生のことについてばいだった。

★9月27日午前3時にご遺体が播磨町へ帰った日、藤沢恒夫先生がぼくをさがしてくださったそうだが、その日のぼくは人様の前に出られないような状態ではなかったのである。10月1日の初七日にもおまいりしなかつた。とてつもなく仏壇の前へすわれないと思ったからだ。

★話がもどるが、「漫才」の初校を阿倍野の市大病院へ持って行って、先生にお見せしたら、午後半月ほどなので、ぼくの繰るページへ軽く目を通されただけだ

が、一川柳寄席の句の集まりは？」「はじめて口を開けた。」「夢路いとしきんが佳い句を送ってくれまして、東京のてんや、わんやさんも句を送ってきまして」と申しあげると、心からうれしそうに「ほう、よかった、よかった」というような笑顔をされた。先生のお顔の最後はこの笑顔だった。(その後、何回か病院へ行ったが、遠慮して詰め所で看護婦さんからご容体をきくだけで帰った。9月26日もおうかがいしたが、それから8時間ほどして亡くなられたのである。)

★秋田先生はこれまでに十数種の雑誌を出されたが、いずれも「編集兼発行人」は林広次(ご本名)になっていたのに「漫才」は前のも復刊のまぼくになっている。こんな例は他誌にもなかったのではないか。ぼくを育てるための破格の「勲章」だったのに、不肖の弟子はこの態らしくである。まったくもって慙愧に堪えない。

★よい年をお迎え下さい。(不二田一三夫)



思いたったらデリカタイム

お求めやすい価格で6種類

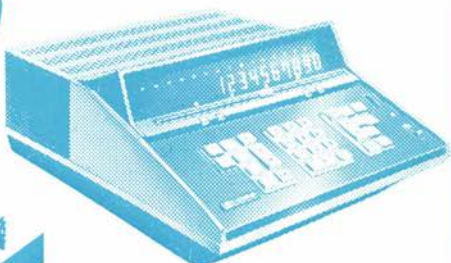
●価格が手軽 ●サイズが気軽 ●500ml/200ml 各赤・白・ロゼの合計6タイプと種類は豊富 ●栓はコルクスクリューのほかに、イージーオープンキャップ ●しゃべりたデキャンタータイプ ●中味は人気のベストセラーワイン デリカ...と、いいことずくめ

なんと/500ml 赤・白・ロゼ 450円
あらっ/200ml 赤・白・ロゼ 200円

三井サントリーワイン
デリカ・タイム

製造・販売 サントリー株式会社

タッチでえらば やっぱりサコム



見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
16けた2メモリ高級品

SANYO 三洋電機株式会社